

花輪古館跡 発掘調査報告書

1994—3

秋田県鹿角市教育委員会

序

鹿角市内には、「鹿角四十二館」をはじめ、数多くの中世の館跡が所
在し、秋田県内でも由利地方とともに、中世館跡の宝庫として知られ
ています。

この度、平成9年の国民体育大会冬季スキー競技会会場となる花輪
スキー場への基幹道路の整備事業が計画され、この事業により花輪古
館跡の一部が消失するため、発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、中世の遺構や遺物の他に縄文時代や平安時代の竪穴住
居跡が発見され、この地が中世以前から生活の場として利用されてい
たことがわかりました。

本報告書はこれらの調査の成果をまとめたものであります、文化
財保護に対するご理解と歴史の上で些かでも役立てば幸いに存じます。
最後になりましたが、調査にあたりご指導、ご協力くださいました
関係機関、各位に厚くお礼申し上げます。

平成6年3月

鹿角市教育委員会

教育長 浅 利 忠

例 言

1. 本報告書は、秋田県鹿角市花輪字古館、字福士川、字陳場に所在する花輪古館跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書の執筆は、調査員・調査補助員が分担し、文書各々の文末に記した。
3. 資料の鑑定は、下記のとおり依頼した。

陶磁器鑑定 金沢大学 教授 佐々木 達夫

青森県浪岡町役場 主査 工藤 清泰

石器類石質鑑定 秋田県立十和田高等学校 教諭 錦田 健一

4. 土層・土器などの色調の記載には「新版標準土色帖」(日本色彩研究所)を使用した。
5. 本報告書に記載した地形図は、建設省国土地理院発行の『花輪』(S : 1/25,000)を使用した。
6. 遺物の実測・採石・トレース等の一連の整理作業は、調査員・調査補助員が行った。
7. 本報告書に収載した図版のスケールについては、各々に示した。なお、写真図版については任意の縮尺とした。
8. 本報告書の文中において、用語の主たるものは統一するように努めたが、数度に渡り使用しているものは簡略している場合もある。
9. 図版で下記のような記号やスクリーン・トーンを使用した。

S I …… 竪穴住居跡 S B …… 建物跡 SK (T) …… T ピット Pit …… ピット

SK …… 土壙 SD …… 槽状土壙  …… 遺構確認面以下の土層

10. 発掘調査・報告書作成にあたっては、下記の方々から御指導・御助言をいただきました。
記して感謝の意を表します。(敬称略、順不同)

桜田 隆 (秋田県埋蔵文化財センター) 田村 栄 (大館市立駒込内小学校)

板橋 範芳 (大館市教育委員会) 佐藤 樹 (秋田県文化財保護管理指導員)

閔 直 (盛岡市立高等学校)

本文目次

序

例言

本文目次

図版・表・写真目次

第Ⅰ章 遺跡の環境

1. 遺跡の位置と周辺の遺跡	1
2. 花輪古館跡の歴史的背景	1
3. 花輪古館跡の現況	7
4. 遺跡の層序	13

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査に至るまでの経過	15
2. 調査要項	15
3. 調査の方法	16
4. 調査の経過	17

第Ⅲ章 検出遺構と出土遺物

1. A区の検出遺構と出土遺物	
(1) 堀立柱建物跡	20
(2) 柱穴状ピット	21
(3) 土壙	21
(4) 清状土壙	24
(5) 遺構外出土遺物	28

2. B区の検出遺構と出土遺物	
(1) 竪穴住居跡	38
(2) 柱穴状ピット	38
(3) Tピット	38
(4) 土壙	41
(5) 犬走り状遺構	44
(6) 清状遺構	44
(7) 遺構外出土遺物	47

3. C区の検出遺構と出土遺物	
(1) 竪穴住居跡	55

第Ⅳ章 調査のまとめ	60
------------------	----

図版・表・写真目次

図版目次

第1図 花輪古館跡と周辺の遺跡	2
第2図 花輪古館周辺切絵図	8
第3図 現況図（1）	11
第4図 現況図（2）	12
第5図 B、C区基本層序図	13
第6図 A区基本層序図	14
第7図 調査区位置図	18
第8図 A区・B区・C区遺構配置図	19
第9図 第201号柱立石建物跡実測図	20
第10図 A区柱立状ピット配置図	21
第11図 第201～205号土壤実測図	23
第12図 第207～209号土壤、ピット201実測図	24
第13図 第202号溝状遺構実測図	25
第14図 A区遺構内出土土器拓影図	26
第15図 A区遺構内出土石器実測図	27
第16図 A区遺構内鉄製品実測図2	28
第17図 A区遺構外出土土器拓影図（1）	30
第18図 A区遺構外出土土器拓影図（2）	31
第19図 A区遺構外出土土器拓影図（3）	32
第20図 A区遺構外出土遺物実測図（1）	33
第21図 A区遺構外出土石器実測図（1）	35
第22図 A区遺構外出土石器実測図（2）	36
第23図 第102号竪穴住居跡実測図	39
第24図 第101号竪穴住居跡実測図	40
第25図 B区柱穴状ピット配置図	41
第26図 第101～108号土壤実測図	42
第27図 B区遺構内出土土器拓影図・実測図	43
第28図 B区遺構内出土石器実測図	43
第29図 犬走り状遺構実測図	45
第30図 第101～104号溝状遺構実測図	46
第31図 B区遺構外出土土器実測図	49
第32図 B区遺構外出土土器拓影図（1）	50
第33図 B区遺構外出土土器拓影図（2）	51

第34図	B区遺構外出土石器・石製品実測図	53
第35図	第301号竪穴住居跡実測図	56
第36図	第301号竪穴住居跡出土土器実測図(1)	57
第37図	第301号竪穴住居跡出土土器実測図(2)	58
第38図	第301号竪穴住居跡出土土器拓影図	59

表目次

第1表	遺跡一覧表	3
第2表	A区遺構内出土土器観察表	26
第3表	A区遺構内出土石器観察表	27
第4表	A区遺構外出土土器観察表(1)	33
第5表	A区遺構外出土土器観察表(2)	34
第6表	A区遺構外出土石器観察表	37
第7表	B区遺構内出土土器観察表	43
第8表	B区遺構内出土石器観察表	44
第9表	B区遺構外出土土器観察表(1)	52
第10表	B区遺構外出土土器観察表(2)	52
第11表	B区遺構外出土石器・石製品観察表	54
第12表	第301号竪穴住居跡出土土器観察表	59

写真目次

P L 1	花輪古跡跡全景	63
P L 2	花輪古跡跡遠景	64
P L 3	花輪古跡航空写真	65
P L 4	花輪古跡跡遠景・近景	66
P L 5	花輪古跡跡近景	67
P L 6	花輪古跡跡近景	68
P L 7	A区調査区近景、第201・203・204号土壙	69
P L 8	第203・205号土壙	70
P L 9	第206~208号土壙	71
P L 10	B区調査区近景、基本層序	72
P L 11	第102号竪穴住居跡	73
P L 12	第101号竪穴住居跡	74
P L 13	第104号土壙・106号Tピット	75
P L 14	溝状遺構・大走り状遺構	76
P L 15	溝状遺構土層断面	77

P L16	犬走り状遺構、A区近景	78
P L17	C区近景、第301号竪穴住居跡	79
P L18	第301号竪穴住居跡、A区全景	80
P L19	A区・B区全景	81
P L20	花輪通御代官所御絵図	82
P L21	A区遺構内・外出土遺物	83
P L22	A区遺構外出土遺物	84
P L23	A区遺構外・B区遺構内出土遺物	85
P L24	B区遺構外出土遺物（1）	86
P L25	B区遺構外出土遺物（2）	87
P L26	C区遺構内出土遺物	88

第Ⅰ章 遺跡の環境

1. 遺跡の位置と周辺の遺跡

鹿角市は、秋田県の北東部に位置し、北は青森県、東は岩手県と県境を接している。鹿角市ののる鹿角盆地は、奥羽山脈と高森山地に挟まれた南北に長い盆地で、盆地内を北流する米代川は、十和田地区で大湯川と小坂川を合流し、その流れを西へと変える。盆地東側にはこれらの河川及びその支流により形成された河岸段丘、舌状台地が発達している。これらの舌状台地の先端には数多くの館跡が分布している。

花輪古館跡もそれらの館の一つで、西流する福士川の右岸台地上に位置する。花輪市街地の東方500m程の距離で、JR花輪線陸中花輪駅からは1.2kmの距離である。

本館跡の北西300mには中世の黒土館跡、南150mには孫右衛門館跡、南西方向200mには近世の花輪館跡（花輪通要害屋敷）が位置している。また、本館Ⅳc地区には縄文時代後期と平安時代の複合遺跡である御休堂遺跡が、北北西700mには縄文時代中期の大集落である天戸森遺跡がある。

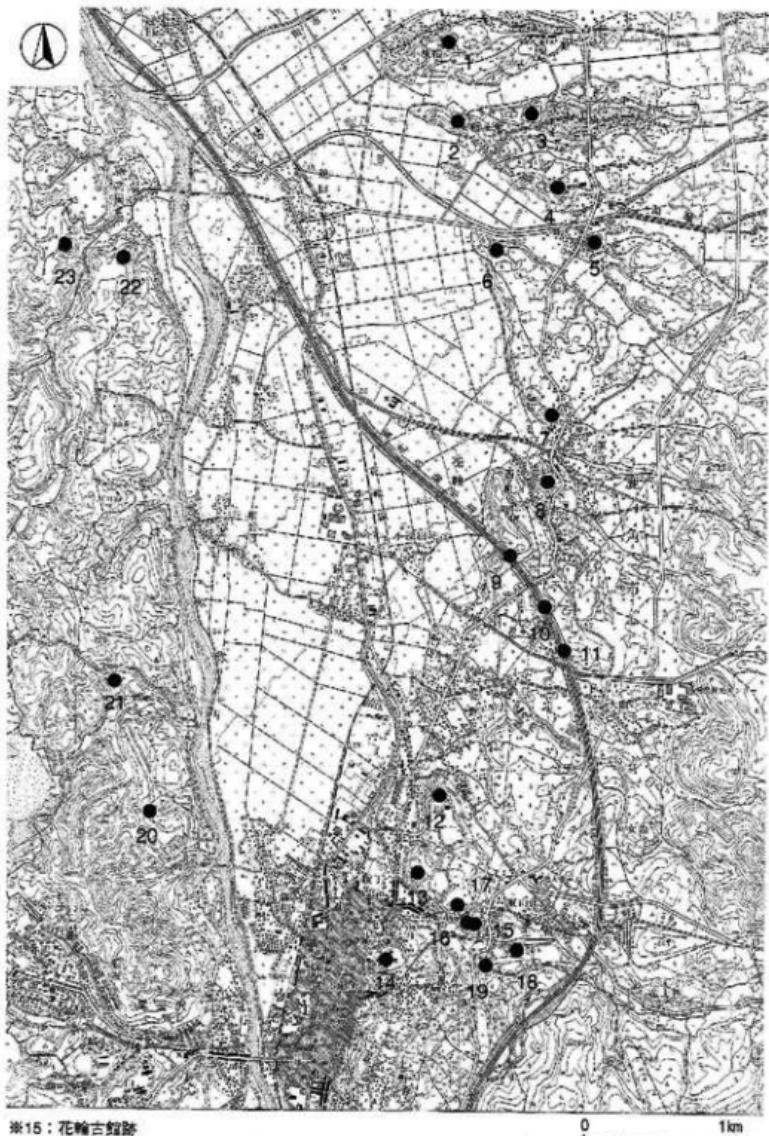
2. 花輪古館跡の歴史的背景

花輪古館は、市街地下花輪の東方、郷社幸稻荷神社へ至る途中に広がる台上に、字古館から字陳場・福士川へかけて所在する。鹿角四十二館の一つで、古来福士川の右岸にあることから臥牛本館とよばれ、代々安保姓花輪氏が領主であったと伝えられてきた。

古館の近傍には、古代から中世にわたる館跡が、数多く所在している。とくに近接する館跡として、福士川右岸の同じ台地上に、古館の北西に隣りあう形の黒土館があり、かつ福士川をへだてた南側150mには孫右衛門館がある。また同じく福士川をへだてる西側約200mには近世にわたり活動した花輪館が、広範な地区を占めている。

古館のうちIV区内にふくまれる御休堂遺跡は、昭和55年宅地造成にともなう事前調査によって、竪穴住居跡6棟（うち縄文中・後期3棟、平安時代3棟）、建物跡14棟、土壙22基、溝状遺構2条等の遺構の検出をみた。建物跡の半数以上に焼土施設の存在が認められたことは、古くからの伝承に古館には花輪鍛冶の産廻^{なまこ}・日向屋敷があったなどと語られていることと関連があるかも知れない。御休堂は、古館の東方約1.500mに鎮座する花輪產土神幸稻荷神社の祭典に際し、御神輿が本町御旅所へ渡御の途中の休憩所となるところから、この名がある。

古館の南側、福士川をへだてた孫右衛門館の、その先端部とわずかな小沢を間にした至近の位置に、下沢田遺跡がある。昭和58年東北自動車道花輪サービスエリアの取付道路工事の際の発掘調査によって、縄文時代のほか、歴史時代の住居跡11棟・土壙9基・堀1条・製鉄用具と



*15: 花輪古館跡

0 1km

第1図 花輪古館跡と周辺の遺跡

第1表 遺跡一覧表

No.	遺跡名	所 在 地	時 代	遺構・遺物・特記事項
1	小枝指館跡	鹿角市花輪字平元古館他	中 世	竪穴住居跡・竪穴遺構・陶磁器
2	新斗米館跡	鹿角市花輪字新斗米他	中 世	竪穴住居跡・陶磁器
3	小 平 館 跡	鹿角市花輪字小平・元村	中 世	館主 小平彦二郎（伝）
4	高市向館跡	鹿角市花輪字高市向	平 安	竪穴住居跡・竪穴遺構・陶磁器
5	高 市 館 跡	鹿角市花輪字高沢	中 世	館主 高市玄蕃（伝）
6	万谷野館跡	鹿角市花輪字万谷野	中 世	
7	地羅野館跡	鹿角市花輪字地羅野	平 安	竪穴住居跡・竪穴遺構・土壙
8	柴 内 館 跡	鹿角市花輪字西町他	中 世	館主 柴内弥治郎（伝）
9	下乳牛遺跡	鹿角市花輪字西町	平 安	竪穴住居跡・フ拉斯コ状土壙
10	乳 牛 館 跡	鹿角市花輪字乳牛平他	平 安	竪穴住居・竪穴遺構・土壙墓
11	妻ノ神館跡	鹿角市花輪字妻ノ神他	平 安	竪穴住居跡・建物跡・土師器
12	天戸森遺跡	鹿角市花輪字陳場他	繩 文	竪穴住居跡・フ拉斯コ状土壙
13	黒 土 館 跡	鹿角市花輪字陳場他	中 世	館主 黒土丹後（伝）
14	花 輪 館 跡	鹿角市花輪字中花輪他	近 世	竪穴住居跡・建物跡・陶磁器
15	花輪古館跡	鹿角市花輪字古館他	中 世	館主 花輪治郎（伝）
16	白山堂遺跡	鹿角市花輪字福士川	繩 文	
17	御休堂遺跡	鹿角市花輪字陳場	繩 文	竪穴住居跡・土壙
18	孫右衛門館	鹿角市花輪字孫右衛門	中 世	竪穴住居跡・土壙・土師器
19	下沢田遺跡	鹿角市花輪字下沢田	平 安	竪穴住居跡・土壙・土師器
20	甚忍沢遺跡	鹿角市花輪字甚忍沢	平 安	竪穴住居跡・製鉄炉
21	高瀬館跡	鹿角市花輪字浦館他	中 世	竪穴遺構・陶磁器
22	高 屋 館 跡	鹿角市花輪字館ノ沢他	繩文・中世	郭・空堀・環状列石・土壙
23	大田谷地館	鹿角市花輪字太田谷地他	平 安	竪穴住居跡・土壙・空堀

※館主は『鹿角由来記』・『鹿角由来集』より。

考えられる把手付土器・フイゴ羽口・鉄滓・製鉄品の刀子・紡錘車などが出土している。台地突端部のごく狭い箇所に限られた調査であるが、おそらく台地内部には規模の大きい集落が存在するものと思われる。

花輪古館の館主は、中世鹿角において勢威をふるった本名安保の花輪氏であった。

『鹿角由来記』に、「鹿角郡四天侍之事」として「都より阿保氏老人鹿角へ御下り、御子三人是非有 一男は大里領知大里上総先祖 二男は花輪村領知花輪次郎先祖 三男は柴内領知にて柴内弥次郎先祖也 其後秋元成田奈良氏御下り被成 奈良氏は大湯村領知也 時の人阿保秋元奈良成田四天士と申也」。ついで「鹿角郡四十二館に侍四十二人居候事」の項のなかに「一、花輪村 花輪次郎領知 本名阿保 大里上総先祖と兄弟也 花輪臥牛本館へ移 其子孫村替にて九戸の円子へ知行三百石にて被遣 後に天正八年大光寺左衛門佐正親を信直公より知行三千石にて被遣也 村数花輪・尾去・石鳥屋・三ヶ田・夏井右五ヶ村領地知 花輪村は大館也」と記している。

安保氏は、武藏国賀美郡安保郷（埼玉県児玉郡神川村元阿保）を名字の地本貫の地とする関東御家人で、鎌倉時代に鹿角郡内にも所領を得て入部した。その関係文書として、鎌倉幕府が安保行員に鹿角郡内柴内村の領知を命じた文保二年十二月二十四日関東下知状（信濃安保文書）や、正中二年十二月六日安保行員譲状案同じく慶応二年九月二十日成田基員譲状案（京都八坂神社文書）などがある。南北朝期以後は鹿角安保氏にかかわる明確な史料を欠くが、天文十五年（あるいは天文五年とも）遺文として『津軽一統誌』に所載の「郡中名字」に、「鹿角三百町ハ四人国人也、所謂奈良・成田・阿部（保）・秋元四人ナリ、奈良ハ大湯・小坂・小江刺四人ニ分ル、成田ハ田内・夏井・名越・三ヶ田・猿雄五人ニ分ル、阿部ハ大里・柴内・鼻和三ヶ所ニ分ル、丹治氏ト云、秋元ハ高瀬・長内・小猿辺三ヶ所ニ分ル、公任郷ノ末孫也」とみえ、戦国期の鹿角における安保氏の勢力を鮮明に浮かび上がらせている。

さらに戦国期の安保氏一族の據る館の分布として、『鹿角由来記』は三ヶ田館、夏井館、松館、尾佐利館、大里館、玉内館、花輪館、柴内館、血（乳）牛館、中柴内館、折加内館をあげ、ほかに石鳥屋館については初め安保氏のち鹿角の旗頭として三戸より南部九郎正友が遣わされたとしている。同書はとくに花輪館について、花輪臥牛本館の花輪氏は九戸の円子へ知行三百石で村替、のち天正八年大光寺左衛門佐正親が南部信直により知行三千石で遣わされたと述べている。しかしこの天正八年はおそらく同十八年の写し違いであることは、その時点で大光寺正親は津軽にあって郡代石川高信を補佐していたとみられ、かつ三戸南部家は未だ二十四世晴政（天正十年没）の治世で、信直は蟄居同様の境遇にあったことからが知られている。

鎌倉以来勢威を振るってきた鹿角四氏は、戦国期に入って南部氏の武力侵略という大きな脅威にさらされることになった。鹿角の平和が破られ一転して兵馬の疾薙をみるに至るのは、応

永二十六年ごろ南部守行が津軽へ出撃し、執拗な攻撃の末に永亨四年（一説に嘉吉四年）安東盛季一族が蝦夷ヶ島（北海道）へ没落せしめた前後に始まる。その後の北奥の情勢は必然的に、三戸南部氏は津軽における支配力の維持に汲汲とし、桧山に移った安東氏は故地回復をめざして虎視眈眈津軽をうかがう、この二大勢力にはさまれかつ津軽進撃路に位置する弱小国人の鹿角四氏と比内浅利氏はつねに向背いすれかの選択を迫られる、という非情な構図をつくりあげていった。

前掲の天文十五年「郡中名字」によって、この時点における安保・成田・奈良・秋元四氏の健在なことは明らかである。しかしその後の永祿八年から十二年に至る安東氏の鹿角進入いわゆる永祿桧山合戦、つぎの天正十年前後の動乱、さらに天正十九年の奥州再任置・九戸争乱という鹿角をまきこんだ変動期のなかで、安保氏・奈良氏の活動がひときわめだつ反面、天文期以後の成田・秋元二氏については、その名さえまったく浮上してこない。一方、毛馬内氏初代朝負秀範が毛馬内館に入った時期を大湯「大円寺縁起」等は天文年中と記し、それに『鹿角由来記』等の鹿角四十二館の項にある谷内・長牛・石鳥屋の各館主が同時期に一戸南部系諸氏と交替したという記述を重ね合わせてみると、つぎの推測が成り立ってくる。即ち、おそらく天文年中の後半に南部氏の軍団が鹿角へ進攻し、北部の毛馬内、南部の谷内・長牛・石鳥屋などの成田・秋元氏一族の館々を激闘の末に占領し、多年の念願とした鹿角郡内における南部氏勢力の重要な拠点を一挙に構築することに成功した。戦いに敗れた旧館主の成田・秋元両氏は、一族ごとく郡外へ去り、おもに比内西部・河北方面に新天地をもとめたといわれている。

従来、花輪古館は鹿角四氏のうち安保姓花輪氏代々の居館であり、その西側に広がる花輪館は大光円寺正親による天正十八年以後の築城であるという説が、もっぱら行われてきた。この推測は、花輪氏をとりまく環境が平和裡に推移したのであればともかく、きびしい戦国的状況のなかで終始苦闘を強いられ続けてきた同氏の立場からみて、考えにくいくことである。

花輪古館は、福士川の流れにそい、米代川にそう盆地主要部からは、長横状に南北につづく頭無・上野平から陳場平に至る台地によってまったく隔離された、いわば袋のごとき地形のなかにあるといつてよい。福士川の右岸は、花輪古館に連続する形で、秋元姓黒土氏を館主とする黒土館へとつなげている。黒土館は、陳場平の全域を占めていたとみられている。天文後期、南部氏への抵抗空しく秋元氏は一族あげて郡外へ退去したことにもない、館主を失った黒土館は、当然隣接する花輪氏の固めるところとなった。あるいは、花輪氏はその以前から徐々に前衛陣地・抵抗線をのちの花輪館に移して、黒土館との連繫作戦を図っていたかも知れない。その後の永祿から天正年間に至るまでの、花輪氏のとった反南部氏の行動をみると、戦略的にも、かなり早い時期に消極的拠点の花輪古館から次第に実戦に対応できる花輪館にその機能を移しつつあったとも考えられる。したがって館の存立期について、花輪古館の下限はいつま

で、花輪館の上限はいつからと、特定できるような状況ではなかったとしなければならない。

花輪氏は、永祿元年、同族の大里氏、柴内氏や、奈良氏一族の大湯氏、小平氏らと結んで、秋田桧山の安東愛季と同盟、南部氏勢力の驅逐をはかり、同八年に始まる安東勢鹿角侵攻の先頭に立って戦った。同十一年安東勢の撤退とともに、花輪氏ら国人たちは一時郡外に逃れたが、まもなく南部氏に晴政・信直館の相続がおこったことを機に、鹿角の旧領に復帰した。花輪氏らはその後、晴政側に党して、反信直の態度をとりつづけることとなる。

天正年代に入って、元秋田子爵家藏の「済合戦覚書」の一項に、「愛季ノ時 南部領ノ内シワ（斯波）・シツクシ（季石）・カドノ（鹿角）花輪ハウキノ守 ケマナイ殿・カシラ也コレラヲシタガエ礼ニキタリ 仙北ハヨトカハナ切取」云々の記載がある。「岩手県史」にしたがえば、この覚書は安東愛季死後の口述書と推定される。愛季は天正十五年九月まで存命しているので、それ以前のものとするも実年代は明らかでない。とはいへ愛季は同年八月仙北淀川へ出陣して戸沢盛安と戦い、その陣中で急病を発しやがて没しているので、この記事はその没年にかなり近いものと想像される。花輪ハウキノ守は伯耆守親行のことと、當時南部一門の毛馬内朝見信次をも誘い、桧山安東氏のもとを訪問している。このような行動は、南部方からみれば、あまりに露骨な敵対行為であった。去る天正十年晴政の死により南部氏二十六代大守となった信直の決断の結果、花輪氏は遂に九戸郡円子村へ所替えとなって鹿角郡を去った。ここに花輪館は領主を失ったが、花輪氏の不幸はさきに南部晴政の死にあい、その五年後安東愛季の没を迎えたことにあった。これまで長年の間弱小国人の地位を保つため、相対する二大勢力の均衡の上に立って権謀術策をめぐらし、その勢威の温存に成功してきた花輪氏の命運も、ついに尽きてしまったのである。

花輪氏の鹿角退転・花輪館放棄の年代もまた、今のところ明らかになっていない。從来天正十年前後の出来事といわれてきたが、周囲の情勢からみて同十五年安東愛季没後とするほうがむしろ妥当であるように思われる。花輪氏あとの花輪館の経営については暫らく明らかでないが、三戸南部氏もまた多事多端をきわめ、十六年三月津軽郡代にして浪岡城主の南部政信の急逝と大浦為信の反乱による津軽喪失の危機、翌年十七年初め南部勢による比内大館城占領と各地の転戦、豊臣秀吉の小田原攻めと奥羽仕置の予報とその対処など、次々とおこる難局に応接のいともない状況にあった。花輪館の領主は、天正十八年大光寺正親を花輪城代に決するまで、その時期を待たねばならなかつた。

天正十九年九月、豊臣秀次麾下の奥州再仕置軍は、いっせいに九戸政実の居城九戸城を包囲攻撃した。寄手は五万とも十万ともいわれる大軍、相対する籠城軍わずか五千人、激しい攻防戦の末四日間にして落城したといわれる。降伏した九戸方の首謀者政実ほか七人は、秀次本陣の栗原郡三迫へ送られ、斬首された。その七人のうち櫛引・久慈・七戸・一戸四氏はともに九

戸氏の一門縁類、ほかの円子（花輪）光種・大湯昌次・大里親基三氏はそろって鹿角国人であった。勝利をまったく予期できない九戸方にあえて加担、入城し、遂に自決・自裁にひとしい道を選んだのは何故であったか。天文以来鹿角郡を蚕食し、国人たちを憤死と退去に追いやってきた三戸南部氏に対する、国人最後の意地を示したものというほかはない。

（安村 二郎）

3. 花輪古館跡の現況

花輪古館跡の現況については、去る昭和61年に刊行した鹿角市文化財調査資料30「館跡航空写真測量調査報告書（5）・鹿角の館」所載の「花輪古館」のうち「立地と現況」の項に掲ることとし、一部加筆のほかはほとんどその文を再録した。

花輪古館（以後古館とする）は、奥羽山脈の麓から盆地中央の低地に張り出した福士川（東→西）に臨む台地南縁部分に、構築されている。古館の構築されている台地上面は、平坦地となっており、周辺の低地との比高差は約13~20mである。この台地は、古館付近からその幅を拡げ、また西端に於いては、周辺低地との比高差約30mとなる。古館付近の福士川流域は、台地に囲まれた狭い低地となっている。多くの侵蝕谷が台地の奥まで入っており、古館の南側台地には、台地状地形が到る所に認められる。その中のいくつかには、明らかに館跡と認められるものもある。

花輪古館周辺は、近年、宅地開発等によって破壊が激しくなっている。

第I郭（上部平坦地、南北90m×東西120m、以後数値のみ記す）

古館の主郭であったと思われるI郭は、古館の東西端（字福士川）に位置する。郭の上面は平坦地で、現況は大部分がりんご園となっている。郭上面の内部及び周縁部分に、土壘等の遺構は認められない。郭の南裾を洗うように福士川が流れている。その為、郭の南側崖面には、崩壊の跡が認められる。

郭上部の東南隅に、一面笹藪に覆われた区域（35m×10m）がある。笹藪の中に、東方三倉山に向かって立つ「天之目一神」の碑や、石祠が散在している。本館神社の跡とも、三岳参りの腰脱ぎをした場所とも伝えられている所である。

りんご園中央付近の西側に、「円子右馬丞」と刻まれていた小さな石碑の残存部分がある。

郭上部東側崖縁中央に、窪地（10m×7m）がある。上面より4m下に中段があり、下方に通じている。郭上部へ通じる登り口の跡と言わわれている。窪地は一面笹藪に覆われており、下方は宅地化が進み、旧状はわからない。

郭の西側先端部分は、空堀（北→南、上面幅20m、底面幅12m、長さ50m、深さ一東側起算-11m、現況荒地）によって截れた小丘となっている。上部は平坦地（10m×9m）となっ

ており、白山堂の跡地と伝えられている。現況は荒地で、笠置の中に、白山堂の礎石であったと思われる石が散乱している。鹿角地方の館跡には、先端部分を意図的に截った例が、他にも見られる。その意図するものは不明であるが、宗教的性格のものではないかと推察される。

郭の上部北縁6m下には、幅12~15mの帯状の平場が廻っており、前記の空堀に通じている。平場の北西の崖縁に盛土（東北↔西南、高さ3m、長さ2.5m）が認められる。東縁下には、平場は認められない。南縁下にも平場は存在しないが、その痕跡が認められる。平場は福士川の流れによって、消滅したものかもしれない。



第2図 花輪古館周辺切絵図

I郭の北側、III郭・IV-c地区との間は、大きな侵蝕谷となっている。その中を東山方面に向かう市道が通り、陳場の坂といわれている。陳場の坂の明治19年改修額をみると「旧來の作場通路は陳場の坂と唱ふる鞍坂にして、人馬の往来甚だ困難不便甚少なからず候に付一畠地獻納新道開通仕り度」云々と認めている。現在の市道に改修されるまでは、おそらく北側御休堂寄りに急峻な作場道が上の台地へ通じていたのであろう。現在の坂道を上る右側には掘跡が残り、数軒の住宅が建てられている。戦前には、この掘跡に一面葦の類が生い茂っていたという。

I・III郭の間は、埋め立てられているが、ところどころに湿地が認められる。

第II郭 (85m×120m)

第II郭は、I郭の東側（字古館）に位置する。I・III郭との間は、沢（大規模農道が通っている）によって隔てられている。郭の南方150m、福士川の対岸には、孫右衛門館が対峙している。郭北縁の北西隅に、空堀（東→西、上面幅13m、底面幅7m、長さ17m、深さ-II郭起算-4m）が残っている。北東側にも、この空堀を通じると思われる窪地（8m×32m、湿地）が北東隅まで認められる。II郭は、これらの空堀によって、台地と截れていたと思われる。郭の東側は、上面より4m低い平坦地となっているが、破壊がとくに激しい。なおこの空堀には、戦後しばらくの間水がたたえられており、數年前までかなり旧状を残していた。

郭上部は、平坦地となっている。現況は、住宅地となっている。宅地化が進み、旧状を知ることは困難である。郭周縁には、遺構は認められない。郭の南縁の10m下、低地との間に、幅10~18mの平場が東西に走っている（低地との比高差1m）。この平場の西方の延長上には、I郭の旧登り口があるが、通じていた形跡は認められない。平場は、東方和光園下まで延びている。

第III郭 (30~45m×84m)

III郭は、I郭の北側に位置する（字福士川）。郭上部は平坦地で、現況はりんご園である。郭上面の内部・周縁部分に遺構は認められない。郭の南縁～西縁下1.5mに、南東隅から北西端にかけて、幅2~3mの帯状の平場が残っている。

郭は市道（旧県道田山・花輪線）によって、北方の台地と分断されている。郭の北西側などに、道路拡張による破壊跡がある。

本調査によって、III郭が古館の郭であったかどうかは、疑問の余地が出てきた。郭の北縁が確認できないのである。市道は、後世のものであり、市道の北側台地上にも、郭の北縁となるべきものは認められない。明治時代の地図、昭和20年代等の航空写真からもそれと思われるものは認められなかった。

現況から、III郭の北縁を確認するのは、非常に困難である。

第IV地区 (200m×350~400m)

市道の北側の台地（上面のレベルは、I・II・III郭とほぼ同じ）に、館の遺構は認められない。しかし、この台地が、古館とは非常に深い関係にあったことは、充分に推察できる。

この台地をIV地区とし、説明の便宜上、IV-a・b・cとわけて、現況を報告する。

IV-a (100m×80m)

県道と農道によって区切られたa地区（字古館）は、その上面は平坦地となっており、現況は畠地である。東～北側下（7～10m）にかけては、水田が広がっている。北側斜面上に、平場（幅3～5m×長さ30～40m）が2段認められる。

IV-b (200m×130m)

b地区（字陳場）の上面は、平坦地となっている。現況は、畠地・宅地等である。北側から台地上面にかけて、数本の沢が上がってきていている。これらの沢に、人為的構築の跡も認められるが、館に關係するものは不明である。また、西側の沢の延長上に、III郭の西縁があるが、両者が繋がっていたかは、確認できない。北側斜面上に、a地区北側斜面上の平場と繋がる平場がある。

IV-c (200m×180m)

c地区（字陳場）の上部は、平坦地となっている。現況は、畠地・りんご園となっているが近年宅地化が進んでいる。c地区の西側・沢（南→北、幅40m）を隔てた対岸は、黒土館のIII郭となっている。北側は、台地へ通じている。c地区の南側は旧斜面地となりその裾を、市道が通っている。その陳場の坂と呼ばれる坂道は、明治19年以後に開かれたものである。それ以前は、坂の途中の鳥居をくぐる小道が、上部へ通じる道であった。上部に達した所に、幸穂荷神社の御休堂がある。御休堂の北側の宅地造成地が、御休堂遺跡の跡地である。

花輪古館は、自然地形の要害性を利用して構築された、古い形態を隨所に留めている館跡である。

註1. I郭の上部は、りんご園となっているが、その部分のみ意図的に耕作されていない。土地所有者の村山家には、明治36年につくられた「本館神社」と書かれた旗が伝わっている。由来等については不明である。筆者の中にある「天目一神」とは關係のないものがあるが、石祠とは關係があるようだ。

註2. 古館の東方に位置する三倉山は、鍛冶屋の信仰する山である。現在の碑は、大正14年のものである。花輪神明社に「天目一命」以下五神が刻まれた文政13年の碑がある。この碑は、以前は、大正14年碑の位置にあったものである。古くから花輪は、鍛冶屋が盛んであったと伝えられ、「八郎太郎の伝説」にも出てくる。福士川下流の横丁には、鍛冶屋が沢山いたと伝えられている。古館周辺にも鍛冶屋に関する伝承がある。御休堂遺跡出土の焼土施設を伴う住居跡との関係であろうか。

註3. I郭を「詣館」とも呼ぶとも言われている。しかし、「詣館」についても現在は何も伝わっておらず、三岳参りの年中行事もない。

(加筆・安村 二郎)

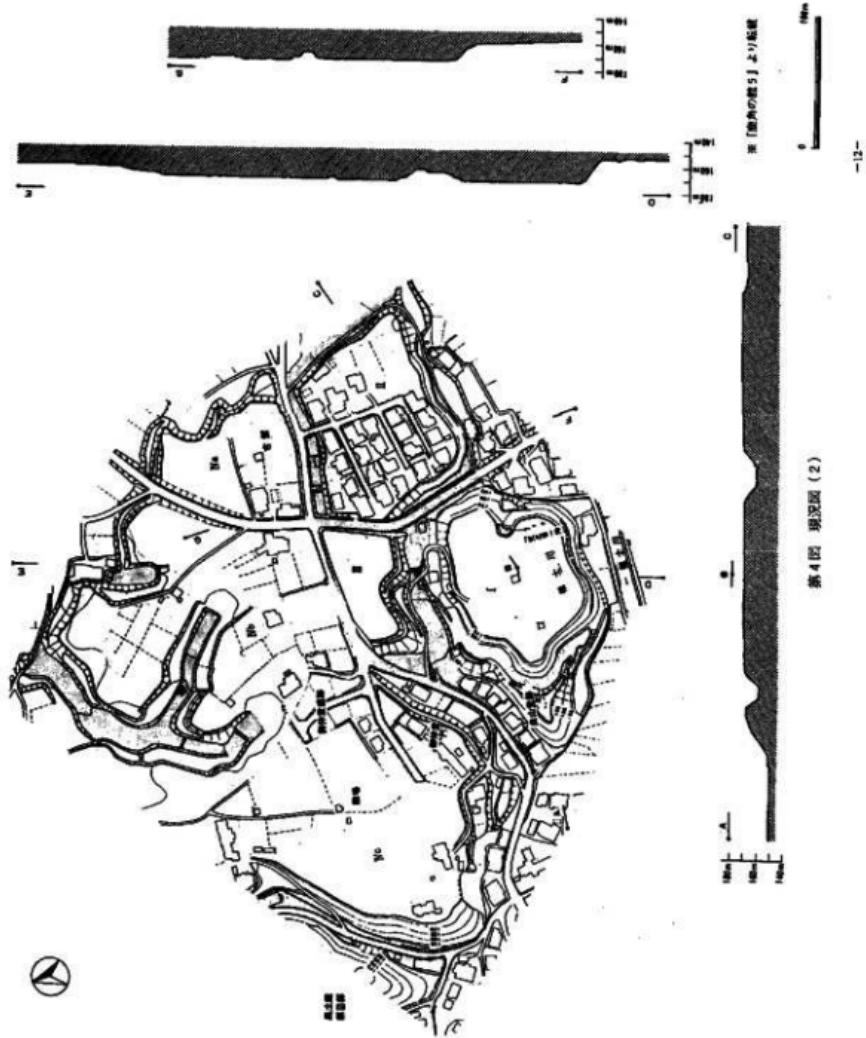
図3 図 現況図(1)

0 200m

※「案内の図」より転載



第4回 現況図(2)



4. 造構の層序

今回の調査の対象となった3地区は若干離れており、市道により分割されているが、本来地続きの台地であったことから、各地区とも同一の分層基準とした。なお、B区南西部ではV層にまで及ぶ擾乱を受けている。

I層 黒褐色土 調査区全域を覆い、層厚は14~44cmを測る。小礫の混入がみられる。

II層 明黄褐色浮石 大湯浮石層と呼ばれる輕石質火山灰層である。B区の北東部で部分的にみられた。層厚は6~18cmを測る。なお、擾乱を受けているII層をII層とした。

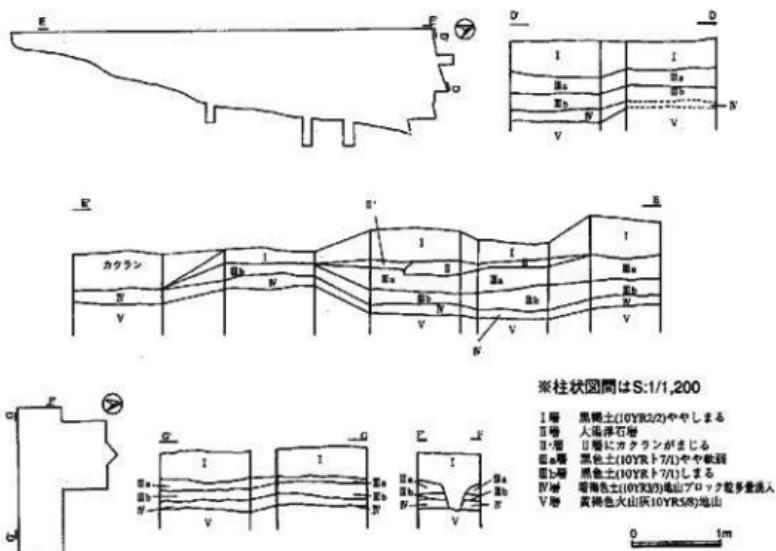
IIIa層 黒色土 層厚4~28cmを測り、やや軟弱である。各調査区とも所々で擾乱を受け消滅している。

IIIb層 黒色土 層厚は4~28cmを測る。IIIa層に比べ、堅くしまっている。

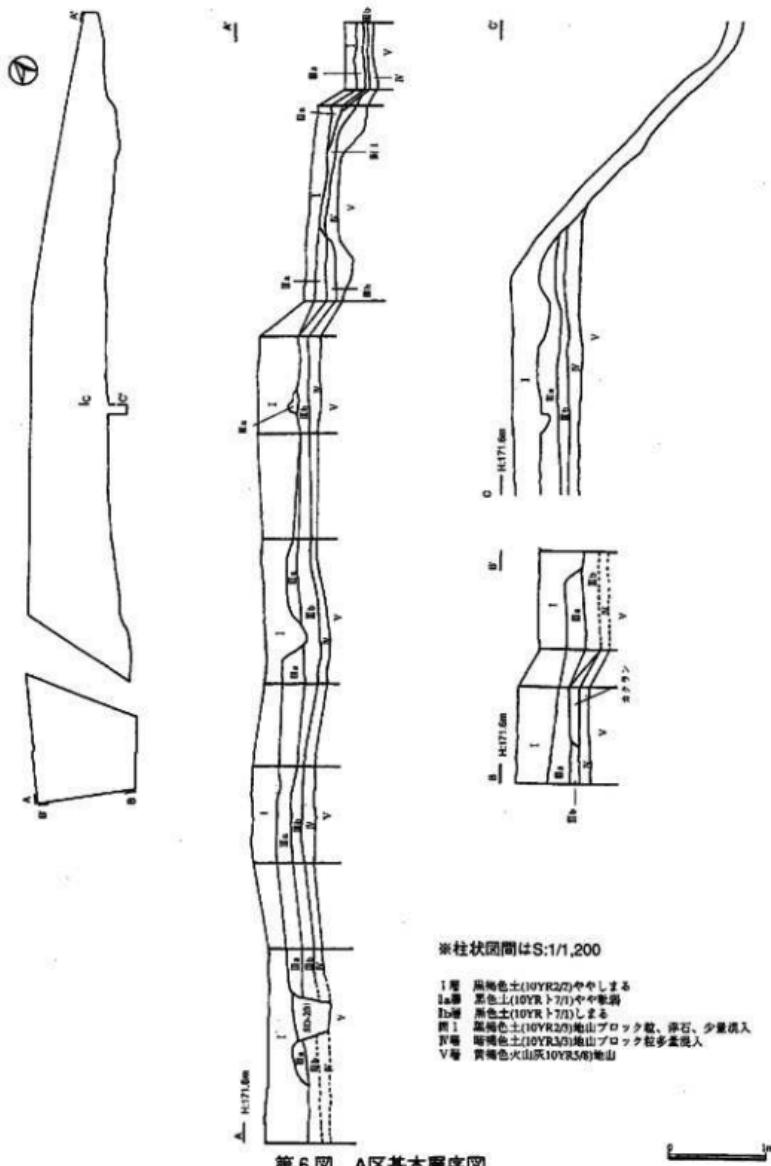
IV層 暗褐色土 地山直上の漸移層で、若干粘性があり、地山粒を多量混入している。

V層 黄褐色土 猿ヶ野火山灰と考えられる火山灰層である。本報告書では本層をV層以外に地山と表現している。検出された造構のほとんどは、この層まで掘り込まれている。

(花海 義人)



第5図 B、C区基本層図



第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査に至るまでの経過

花輪古館跡内を南北方向に縱走する市道高井田西町線と東西方向に横断する市道横丁東山線（旧県道田山花輪線）は第Ⅱ郭北西端部分で交差する。この交差点に向かう各方向からの勾配が急であることから、冬期間の車の通行には支障を来たしていた。また、これらの路線が花輪小学校及び花輪第一中学校への通学路であることから、以前より交差点周辺の道路改良の要望が地域住民により出されていた。

平成2年9月、全日本スキー連盟が平成9年の国民体育大会冬季大会スキー競技の鹿角市での開催を決定したため、その会場となる花輪スキー場への基幹道路の整備が急務となつた。そのため、鹿角市は当該2路線を含めた3路線の整備計画を平成3年9月に作成、平成4年度より緊急地方道路整備事業として実施することとなつた。同年10月、鹿角市建設課より鹿角市教育委員会に花輪古館跡の保存方についての協議が持ち込まれ、協議を重ねた結果、計画変更が困難であることから、道路整備事業により消失する部分を発掘調査し、記録保存することとなつた。なお、発掘調査は工事期間及び他の発掘調査計画との関係から、平成5年9月1日から11月29日までの2ヶ月間で実施することとなつた。

2. 調査要項

1. 遺跡名 花輪古館跡
2. 調査地 秋田県鹿角市花輪字隙場5-2他
3. 発掘調査面積 1,075m² (A区 585m² B区 361m² C区 129m²)
4. 調査期間
発掘調査 平成5年9月13日～平成5年11月15日
整理・報告書作成 平成6年1月19日～平成6年3月31日
5. 調査主体者 鹿角市教育委員会
6. 調査担当者 鹿角市教育委員会 生涯学習課
(主任 秋元 信夫)
7. 事業主体者 鹿角市建設部建設課
8. 調査参加者
調査指導員 熊谷 太郎 (秋田県教育庁文化課 学芸主事)
調査員 安村 二郎 (鹿角市史編纂委員)
鎌田 健一 (秋田県立十和田高等学校 教諭)
成田 典彦 (鹿角市立花輪第一中学校 教諭)

調査補助員 花海 義人、柳沢 和仁
柴田 絵里、黒沢 圭子、大森 寿子
作業員 石木田要四郎、工藤昭三郎、佐藤 一男、佐藤 留吉、土井口敬三
間藤義三郎、米村 米松、阿部 ヨエ、安保 京子、大森 栄子、
落合 昭子、勝山 敏栄、工藤 美和、熊沢 七キ、児玉 フテ、
佐々木イサ、館 樹子、田中 トシ、田中 ノブ、田中美千栄、

9. 生涯学習課

課長 川又 節三（文化史跡整備室長兼務）
課長補佐 小笠原 真
村木 伸夫
主任 秋元 信夫（庶務・調査担当）
兎澤 精子（庶務担当）
主事 藤井 安正
臨時職員 古川 孝政（庶務）

10. 協力機関・協力者

秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター、吉田育次郎、村山 正（土地所有者）

3. 調査の方法

発掘調査対象地が3地点に分散しているため、北側、南側、東側の調査区をそれぞれA、B、C区と呼称した。グリッド設定には市道改良工事予定路線及び付け替え道路幅抗を利用し、各調査区毎の5m単位のグリッドとした。なお、各調査区基準線の磁北からの傾きは、A区N-46°-E、B区N-21°-E、C区N-7°-Eである。杭番号はアルファベットと算用数字で付し、北隅の杭を以てグリッドを呼称した。トレント設定については、グリッドラインを利用し、これに平行する幅1mのトレントとした。

発掘作業は全て手掘りによる分層発掘とし、できるだけ上層での遺構確認に努めた。

遺構の番号については、A区は201番から、B区は101番から、C区は301番から種類別、発見順に付したが、調査の結果、遺構と認めがたいものについては欠番とした。

遺構の精査に際しては、竪穴住居跡では4分割法、そのほかの遺構については2分割法を原則とした。

遺構等の実測については簡易造り方測量を用い、1/20の縮尺で図化した。

遺構外の出土遺物については、各グリッド、各層ごとに一括して取り上げた。なお、遺構内の出土遺物については出土地点を記録するように努めた。

写真撮影には、2台のカメラを使用し、調査各段階の状況を白黒、リバーサルフィルムに収

めた。

4. 調査の経過

立木の伐採、抜根等の遅れから、発掘調査が開始されたのは当初計画を2週間過ぎた平成5年9月13日からであった。また、A区隣接地の林檜への影響を考慮し、調査順序もB区、A区、C区の順に変更した。調査経過の概要はつぎのとおりである。

9月13日、作業員への作業説明、事務連絡の後、B区の技術の片付け、グリッド設定及び環境整備を行う。14日には上記の作業を終了、16日よりB区の北側からI層の除去に取りかかる。21日にはI層の除去作業を終了、遺構確認後、再度同区北側からII～Ia層の除去を行う。また、24日からは郭斜面に設定した4本のトレンチの粗掘も平行して行う。

9月27日には、北東部のIb層上面から平安時代の堅穴住居跡や溝状遺構が確認され、同日よりこれらの遺構の精査を開始する。

9月29日には、上層で遺構が確認できなかった中央部～南西部のIV層までの粗掘を終了、遺構確認を行う。この遺構確認により、中央部から縄文時代の堅穴住居跡、土壙等が確認されている。なお、B区の粗掘が終了間近になつたため、同日にはA区のグリッド設定も行っている。

9月30日からは、B区中央部で確認された遺構の精査とともに、同区北東部のIb～IV層の除去を行う。

10月1日、B区の粗掘を全て終了、A区の粗掘に移行する。A区は土置き場の関係で、北東端より調査を行うこととした。

10月7日までにはB区の全ての遺構精査を終了、12日にはB区の全景写真の撮影を行った。また、同日までにA区北東部の調査を終了したが、同部分からはビット1個が検出されたのみであった。

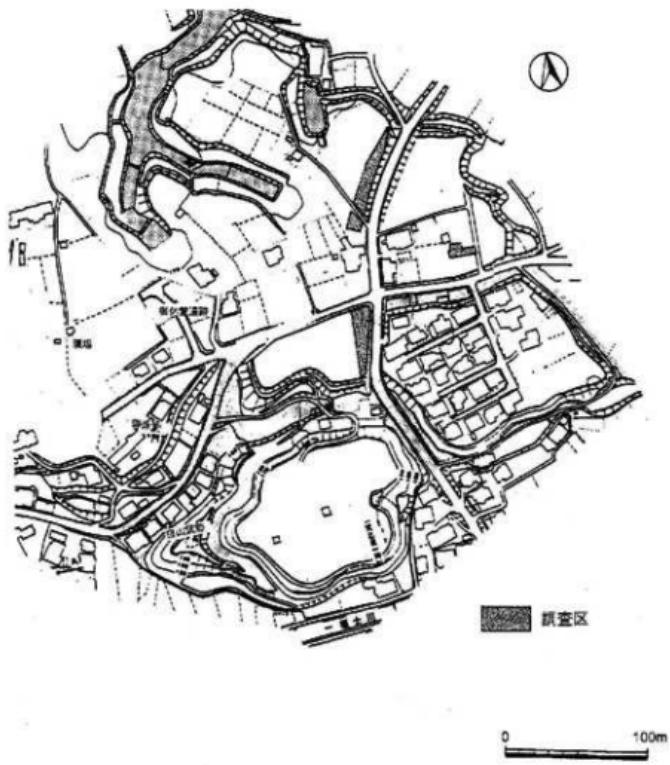
10月20日にはA区中央部のIV層上面までの粗掘を終了し、掘立柱建物跡や土壙が確認されている。21日からはこれらの遺構の精査に着手、また、同時にC区のグリッド設定と同区の粗掘をも行っている。

11月1日にはA区の粗掘は南西部にまで及ぶ。この間、28日までにB区の遺構平面図、29日に同区の基本層序図の作成を完了している。

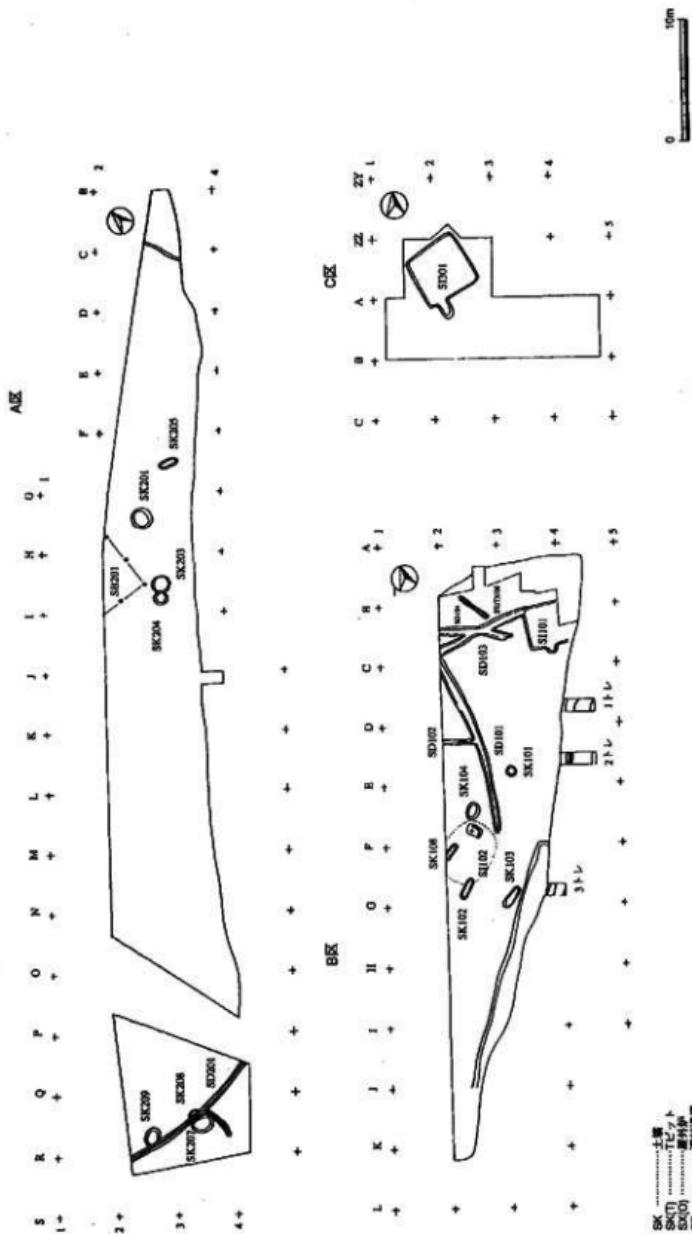
11月5日までにはA区全ての粗掘を完了、8日からはA区南西端の遺構確認及び遺構調査に取りかかる。この遺構精査も10日には終了、11日にはA区の全景写真の撮影を行った。また、12日にはC区の遺構精査も終了、同日同区の全景写真撮影を行っている。

11月15日、A、C両区の遺構平面図及び基本層序図の作成を完了し、2ヶ月に及ぶ全ての調査を終了した。

(秋元 信夫)



第7図 調査区位置図



第6回 A-E・B-E・C-E断面図

第Ⅲ章 検出遺構と出土遺物

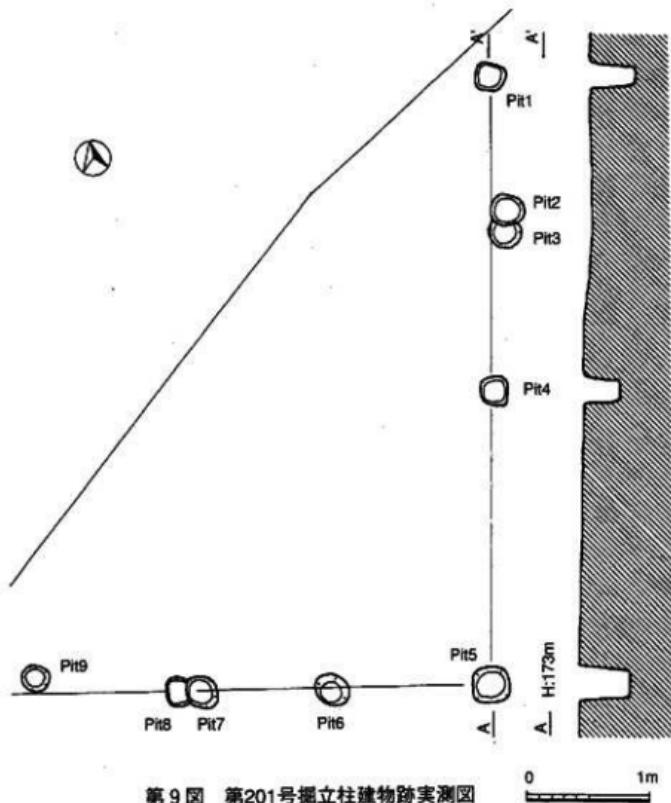
1. A区の検出遺構と出土遺物

(1) 据立柱建物跡 (第9図)

第201号据立柱建物跡

調査区中央部H・I-2グリッドのⅢa層上面において確認した。建物跡の大部分は調査区外に伸びているため全容は明かではないが、確認された規模は5.3×3.9mの建物である。桁行方位はN-13°-Eである。柱間はそれぞれ (N-S、2.32+2.1m)、(E-W、2.26+2.3m以上) である。

柱穴の掘り方は一辺25~30cmの方形で、深さは30~40cmを測る。



第9図 第201号据立柱建物跡実測図

(2) 柱穴状ピット (第10、14、15図、第2、3表)

調査区ほぼ全域から229個のピットを確認した。ピットは調査区北東側と南西側に多く集中し、柱穴の掘り方は方形、円形、椭円形、不整方形と種々であるが、椭円形、円形のものが多い。柱穴の規模は経及び一辺が10~30cm、深さ10~40cmを測る。第201号掘立柱建物跡の他は特に柱配置は確認できなかった。

特徴的なピットには番号を付した。第202号ピットからは磨製石斧1点が出土した。第201号ピットは調査区中央部のH-I-2グリッドに位置し、長軸64cm、短軸58cmの隅丸方形を呈するもので、確認面からの深さは78cmを測る。堆積土は7ブロックで、人為堆積である。ピット内から縄文土器片5点、搔器2点が出土した。

規模的にみて本調査区内には対応すると考えられるピットは他に見当たらず、調査区外に延びるものと考えられる。

(3) 土 壤

第201号土壤 (第11、14図 第2、3表)

調査区中央部、G-2グリッドのⅢb層上面において確認した。平面形は円形で、規模は長軸166cm、短軸158cm、確認面からの深さは50cmを測る。地山まで掘り込まれ、底面は平坦で堅くしまる。

堆積土は4層に区分でき、自然堆積と考えられる。

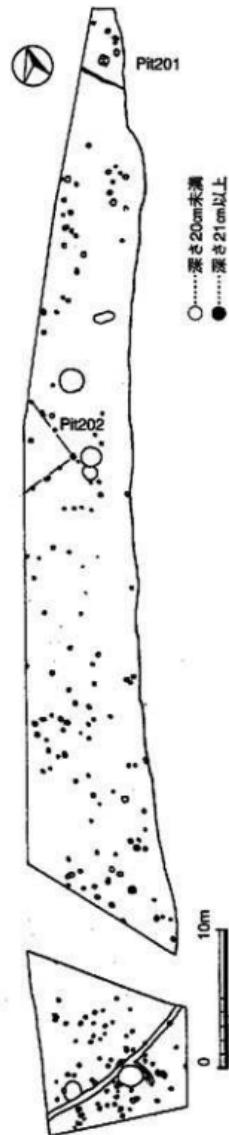
遺構内より縄文土器片1点、搔器2点が出土した。

構築時期は、出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。

第203号土壤 (第11、16図)

調査区中央部、I-2・3グリッドのⅢb層上面において確認した。第204号土壤と重複し、本遺構が新しい。長軸140cm、短軸128cmの円形プランで、確認面からの深さは58cmを測る。底面は平坦で堅くしまり、地山を掘り込む壁は、底面より内湾しながら立ち上がる。

堆積土は7ブロックに区分され、人為堆積と考えられる。



第10図 A区柱穴状ピット配置図

遺構内より鉄製品4点が出土し、1は鎌、2は刀子、3は穂摘具である。

出土遺物より、構築時期は平安時代～中世と考えられる。

第204号土壙 (第11図)

調査区中央部I-2・3グリッドのIIb層上面において確認した。第203号土壙と重複し、本造構が古い。径100cmの円形を呈し、確認面からの深さは110cmを測る。壁は地山を掘り込み底面より外反しながら立ち上がる。底面は平坦でしる。底面には中央からは柱穴状ピットが確認され、ピット内には礫がつめられていた。その形態から陥し穴状遺構とも考えられる。

堆積土は10ブロックに分けられ、人為堆積である。

遺構内から遺物は出土しなかったが、構築時期は、新旧関係及び堆積土から縄文時代と考えられる。

第205号土壙 (第11図)

調査区北東部のF-3グリッド、IV層において確認した。規模は長軸148cm、短軸58cmの長楕円形プランである。確認面からの深さは36cmを測り、長軸方向はN-63°-Wである。底面はやや鍋底状を呈し、北西部壁は底面より内反して立ち上がる。

堆積土は3ブロックに分けられ、人為堆積と考えられる。

遺構内から遺物は出土しなかったが、構築時期は、確認面から縄文時代と考えられる。

第207号土壙 (第12、16図)

調査区北東部Q-3グリッド、IIa層上面において確認した。第202号溝状遺構と重複し、本造構が古い。規模は長軸188cm、短軸130cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは30cmを測る。

堆積土は黒色土の單一層で、人為堆積と考えられる。

遺構内より鉄製品1点が出土した。確認面および出土遺物より構築時期は平安時代～中世と考えられる。

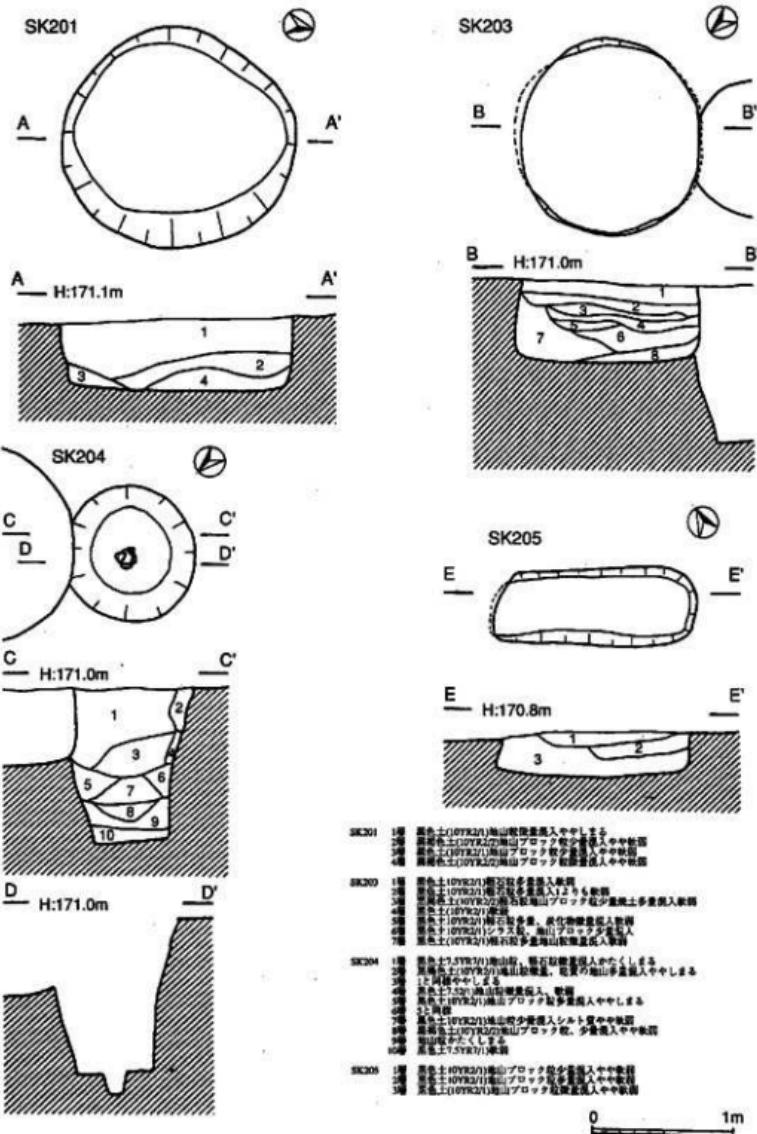
第208号土壙 (第12図)

調査区南西部Q-3グリッド、IIIa層上面において確認した。第202号溝状遺跡標と重複し、本造構が古い、規模は長軸76cm、短軸60cm以上の楕円形を呈し、確認面からの深さは18cmを測る。

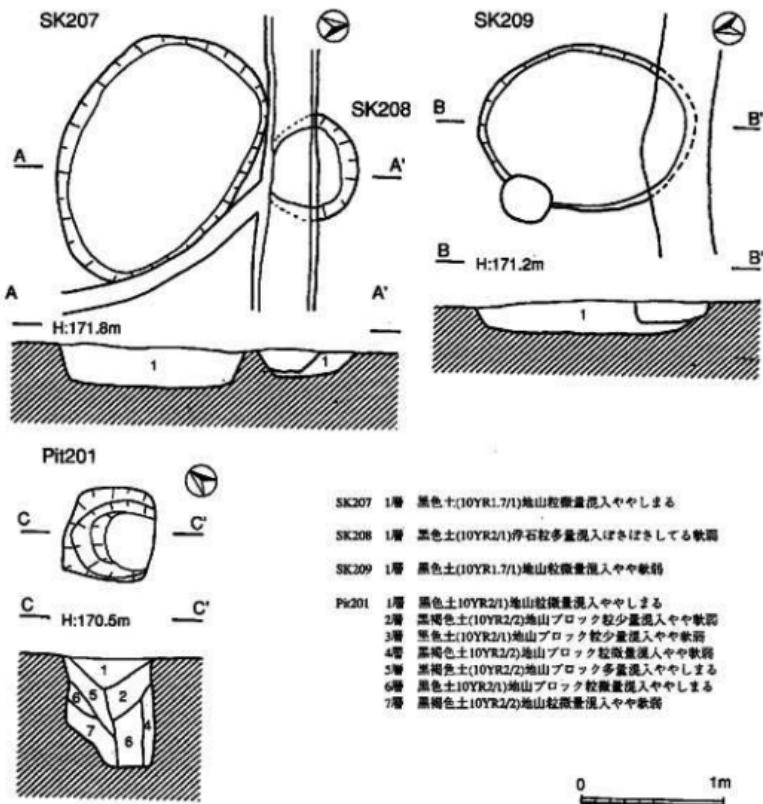
堆積土は黒色土の單一層で、人為的堆積と考えられる。構築時期は確認面より、平安時代～中世と考えられる。

第209号土壙 (第12図)

調査区南西部のQ-2グリッド、IIIa層上面において確認した。第202号溝状遺構と重複し、本造構が古い。想定される規模は長軸154cm、短軸120cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは26cmを測る。底面は平坦で、壁は地山を掘り込み、やや外反しながら立ち上がる。



第11図 第201～205号土壤実測図



第12図 第207～209号土壤、ピット201実測図

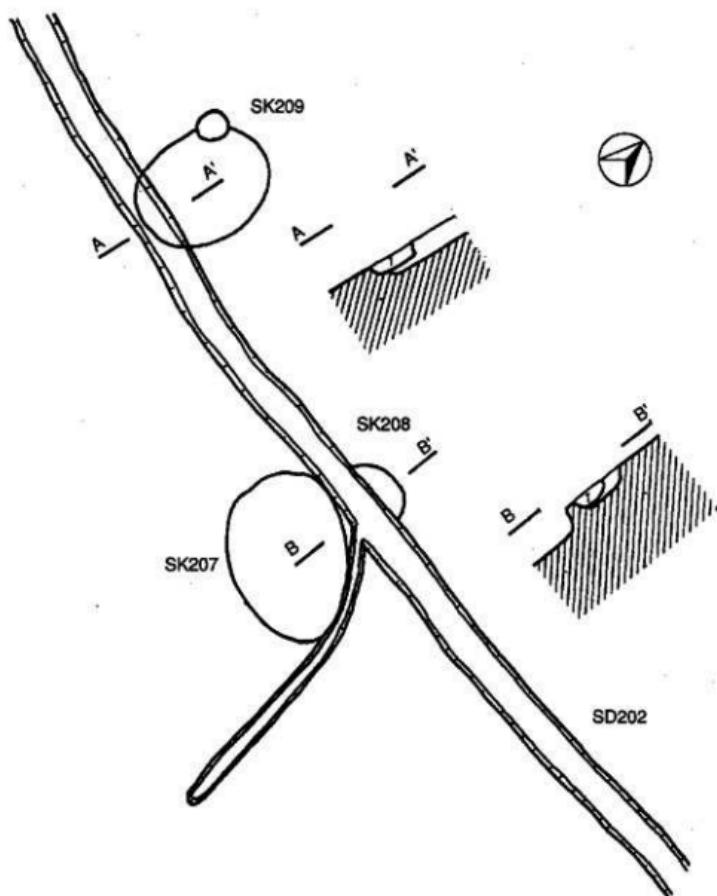
堆積土は黒色土の単一層で、人為堆積と考えられる。

遺構内より遺物は出土しなかった。確認面より、構築時期は平安時代～中世と考えられる。

(5) 溝状遺構（第13図）

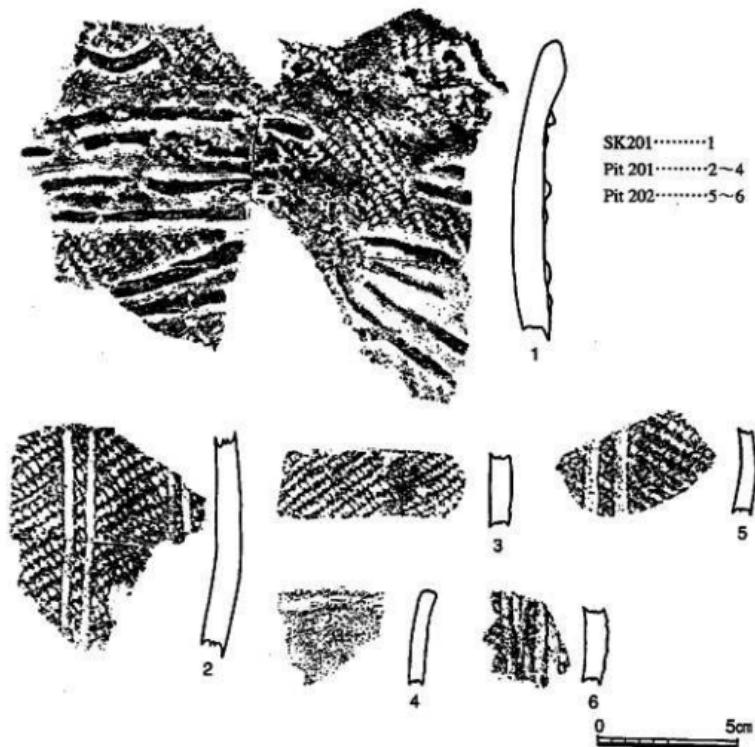
第202号溝状遺構

調査区南西部のQ・R-2、P・Q-2グリッドで確認した。確認し得た長さは、11.6m、幅40cm前後を測り、深さは20cmである。底部は北西側では平坦で、南西側で鍋底状を呈している。構築時期は、堆積混入物から平安時代以降と考えられる。



0 2m

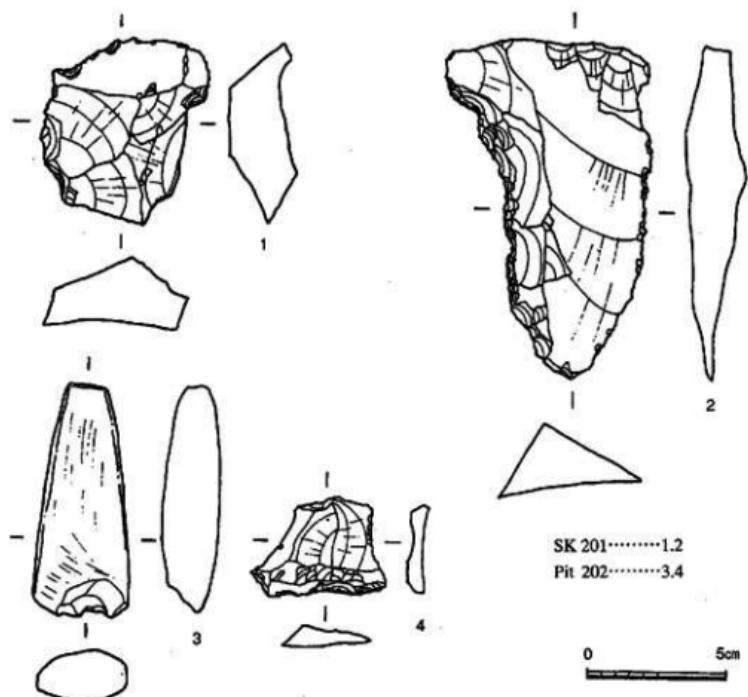
第13図 第202号溝状遺構実測図



第14図 A区遺構内出土土器拓影図

第2表 A区遺構内出土土器観察表

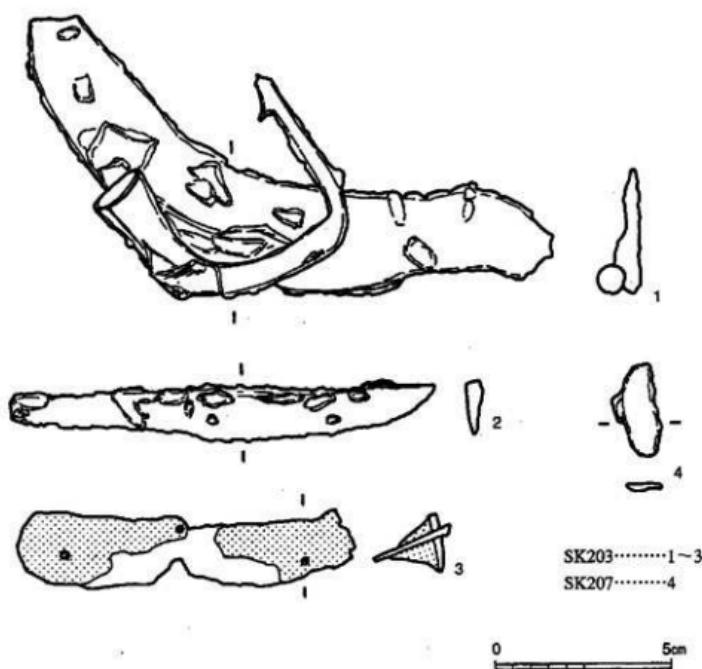
図版号 番号	P L 番号	出土地点	部位	外 面		器厚 (mm)	胎土	焼成	備考
				文 様	色 調				
14-1	21-1	SK 201	口縁	縄文(RL)+隆線	橙(7.5YR7/6)	11	砂粒含	良	
2	2	Pit 201	胴部	縄文(RL)+沈線	灰黄(2.5YR6/2)	9	砂粒含	良	
3	3	Pit 201	胴部	縄文(RL)	浅黄橙(10YR8/4)	8		良	
4		Pit 201	口縁	無文	にふり黄橙(10YR8/5)	6		良	
5	4	Pit 202	胴部	縄文(LR)+沈線	灰黄褐(10YR6/2)	6		良	
6	5	Pit 202	胴部	縄文+沈線	浅黄橙(10YR8/4)	9		良	



第15図 A区遺構内出土石器実測図

第3表 A区遺構内出土石器観察表

図版番号	PL番号	名称	出土地点	法量(mm)			重量(g)	石質
				最大長	最大幅	最大厚		
15-1	21-6	搔・器	SK201	65	51	24	90	硬質頁岩
2	9	搔・器	SK201	119	72	23	161	硬質頁岩
3	8	磨製石斧	Pit202	(83)	34	17	83	緑色片岩
4	7	搔・器	Pit202	34	47	8	12	硬質頁岩



第16図 A区遺構内出土鉄製品実測図

(6) 遺構外出土遺物

土器 (第17~19図、第5表)

遺構外からは、復元土器1点と中期~後期の縄文土器破片、段ボール箱1箱が出土した。なお、土器観察表は第5表のとおりである。

第I群 中期の土器

1類…地文上に隆線文が施文される土器 (1)

1は、深鉢の波状口縁部で、地文上に粘土紐の貼り付けによって脇部には胸骨文が施文されている。地文としてRL縄文が施文され、焼成は良好で、色調は橙色である。

2類…地文上に沈線が横位に施文される土器 (2~14)

2は、地文上に1~数条の沈線、平行沈線により文様が描き出されている。深鉢の口縁部で

地文として RL 繩文が施文され、焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色である。

3類…地文上に沈線が縦位に施文される土器 (15~22)

深鉢が主体を占める。二条の沈線により「人」文を施文するものである。地文として RL・LR 繩文が施文され、刺突文が付加されるものもある。口縁部は平口縁で無文化されるものが多い。焼成は良好で、色調は浅黄橙色である。

本群土器 1類は円筒上層 d式、2類は円筒上層 e式に比定される。また、3類土器は大木 9 式に平行すると思われるもので、中ノ平Ⅲ式土器の特徴を持っている。

第Ⅱ群 後期初頭～前葉の土器

1類…地文上に沈線文が施文される土器 (3~14)

深鉢が主体を占める。器面に大きな文様帯をもち、沈線により S字文、波状文が主文様とし施文される。主文様を沈線により連結するものや、刺突文を付加するものもみられる。地文として RL 繩文が多用される。口縁部は波状及び山形を呈するものがみられる。焼成は良好で、色調は浅黄橙色である。

2類…帶縄文により文様が描かれるもの (23、25)

壹がみられる。腹部上半に隆沈線文により文様帯が区画され、帶縄文により幾何学文が描きだされている。沈線間に LR 繩文が充填される。焼成は良で、色調はにぶい黄橙色である。

3類…無文地に沈線文が施文される土器

24は切断土器で第16図 1と同一個体である。沈線により梢円形文が施文される。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色である。

本群 1類は甕沢式に、2・3類は十腰内 I式に比定される。

第Ⅲ群 中期中葉～後期前葉の土器

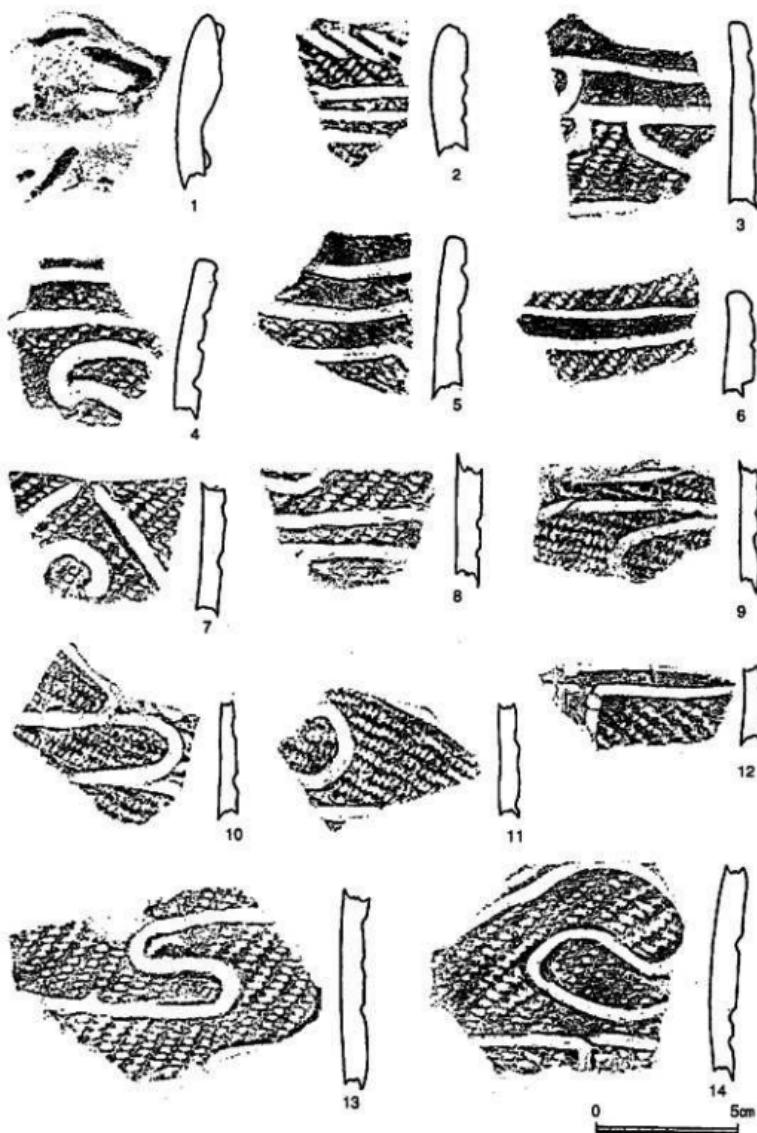
単節縄文、撚糸文が施文された土器 (26~33) を一括した。深鉢形土器が主体を占める。単節縄文が施文される土器には口縁部上端が無文化されるものや、折り返し口縁となるものがある。31・32には結節回転文が施文されている。これらの土器の焼成は良好で、色調はにぶい橙色である。

須恵器 (第19図、第4表)

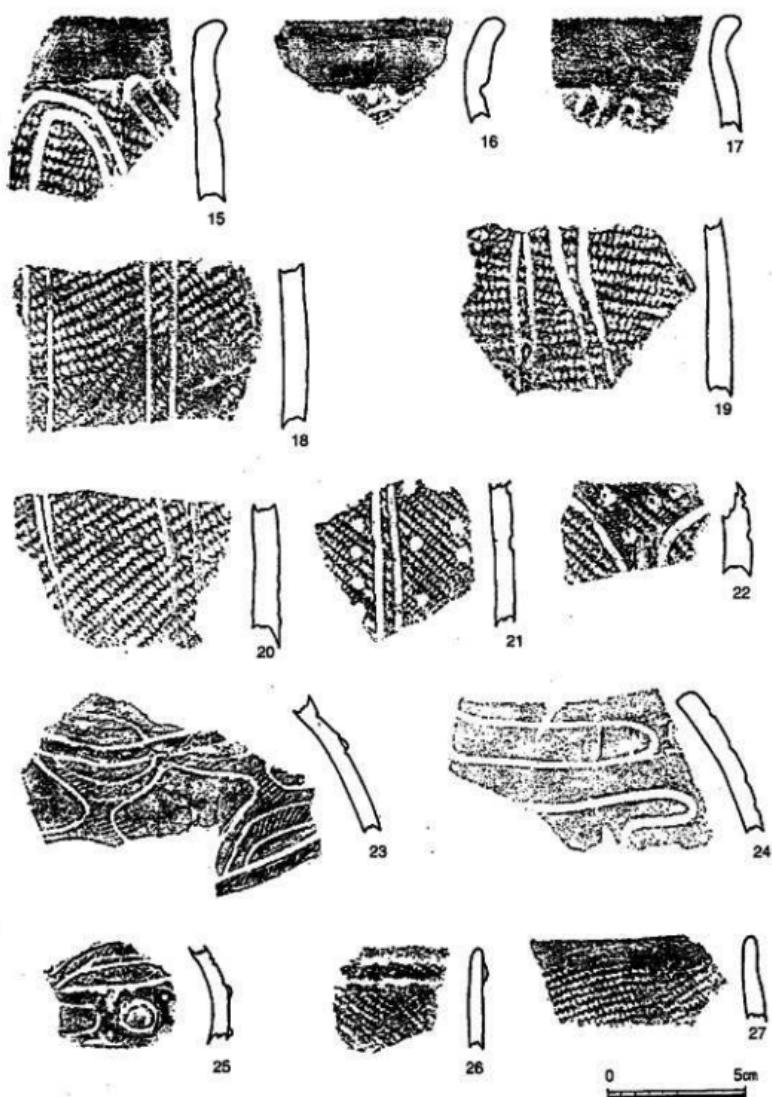
2点出土し、34・35は須恵器壺の胸部破片で外面に単軸絞状帯のタタキ目痕がみられる。

陶磁器 (第20図、第4表)

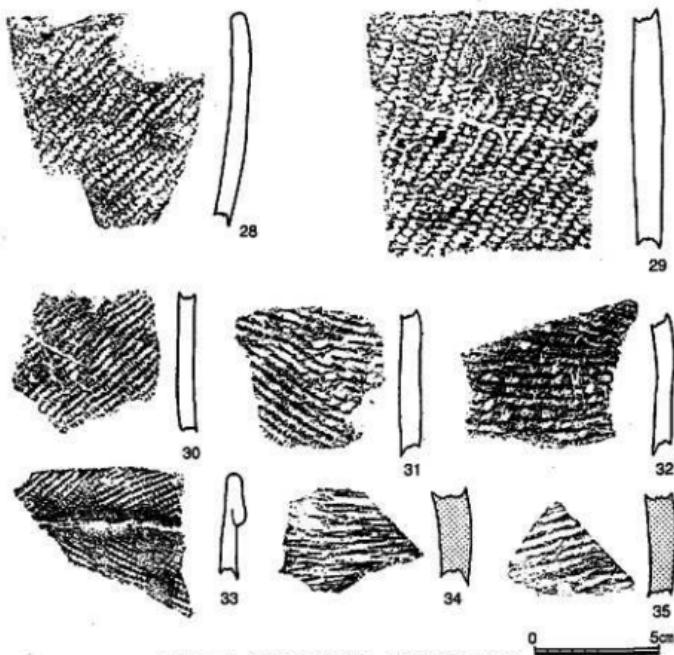
D-3 グリッド、I層より白磁 1点が出土した。碗の口縁部破片で微隆線がみられ、口唇部にはやや厚めの釉がみられる。11~12世紀、中国所産のものである。



第17図 A区遺構外出土土器拓影図 (1)



第18図 A区遺構外出土土器拓影図 (2)



第19図 A区遺構外出土土器拓影図 (3)

石 器 (第21、22図、第6表)

A区遺構外より出土した石器は打製石斧1点、搔器13点、磨石4点の計18点である。

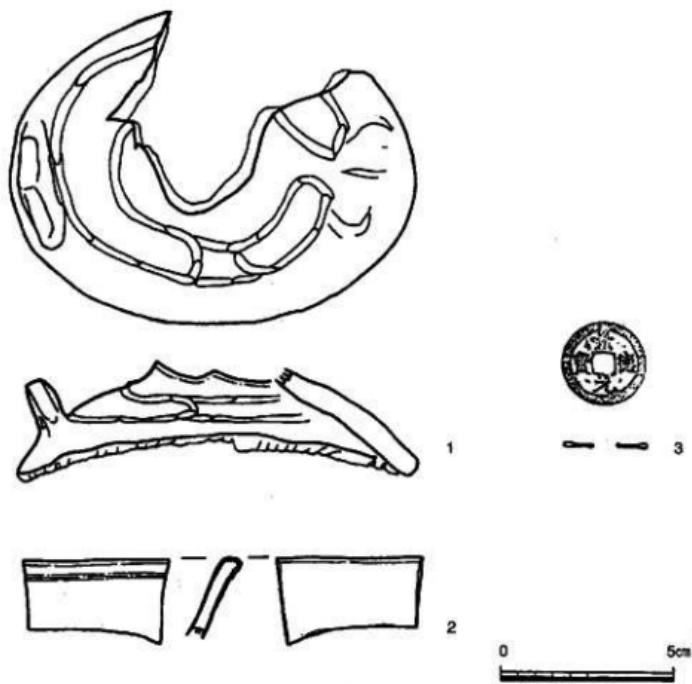
1は打製石斧で長さ6.5cm、幅3.2cm、重さは29gを測る。撥形を呈し、剥離調整は表面にされ、刃部には片刃の剥離調整がなされている。石材は硬質頁岩である。

2~13は搔器で長さ2.5~9.8cm、幅1.9~4.6cm、重さは9~79gを測る。3、5、6、8、11は主要刃部が一側縁に、2、9、10、12、13は主要刃部が二側縁に作り出される。4、7は刃部に抉りのある抉入石器である。石材は硬質頁岩、珪質頁岩、黒色頁岩、砂岩である。

14、15、16、17は磨石で長さ15.3~3.2cm、幅8.6~1.3cm、重さは6~1,180gを測る。なお、17は使用後凹石に転用されている。石材は凝灰石、砂質凝灰石、泥質凝灰石である。

古 錢 (第20図、第4表)

N-2グリッド、I層から出土した。1008年初鑄の中国産の景德元宝である。外径は2.4cmを測り、背文はみられない。



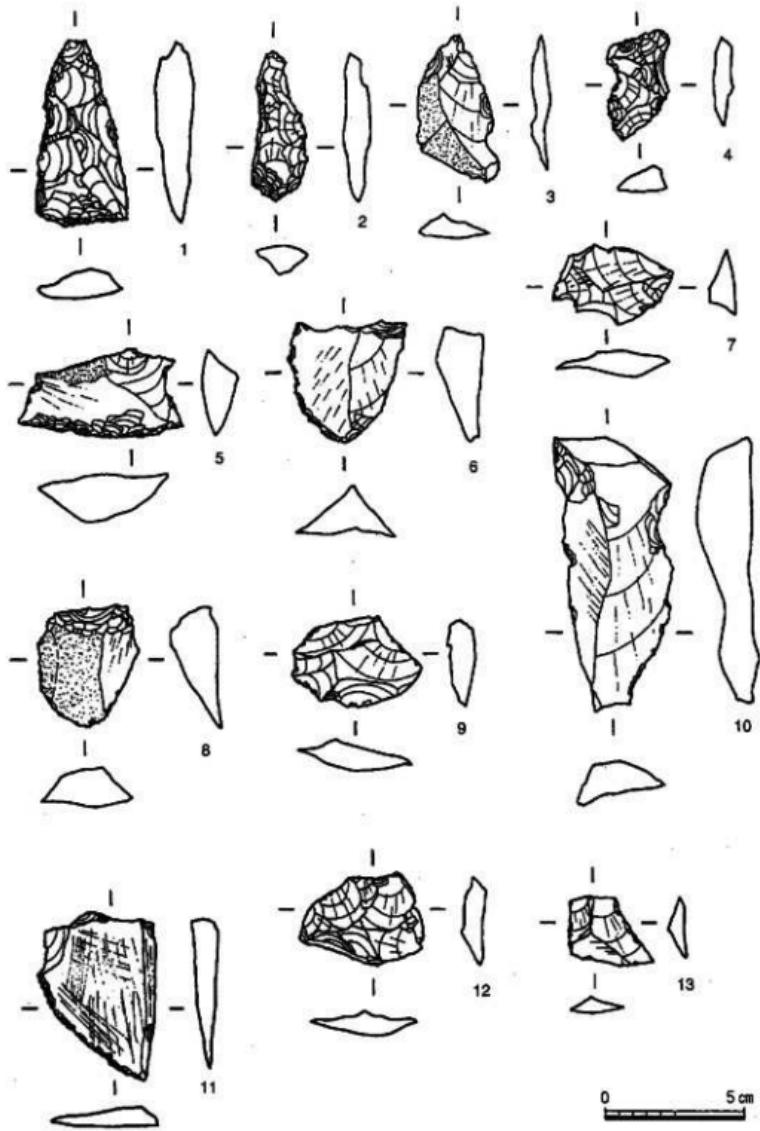
第20図 A区遺構外出土遺物

第4表 A区遺構外出土遺物観察表 (1)

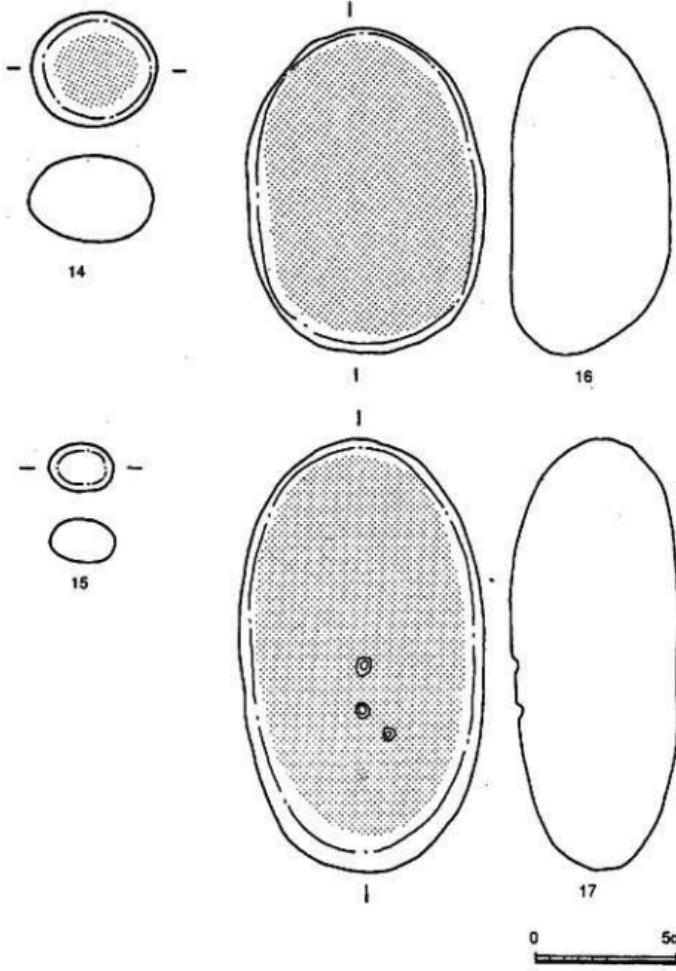
図版番号	P L番号	出土地点	部位	外 面		器厚 (mm)	胎 土	焼 成	備 考
				文 様	色 調				
20-1	21-13	B-3	蓋	沈線	浅黄褐(7.5YR8/4)	8	細砂含	良	切断土器
2		D-3	口縁			4			白磁、碗
3		N-2				2			景德元宝

第5表 A区遺構外出土土器観察表(2)

図版 番号	P L 番号	出土地点	部位	外 面		器厚 (mm)	胎 土	焼成	備 考
				文 様	色 調				
17-1		Q-3溝付近	口縁部	陸繩	橙(SYR6/6)	9	砂 粒	良	
2	L-2	口縁部	沈線+RL繩文	にぶい黄褐(10YR7/3)	12	細砂含	良		
3	D-2	口縁部	沈線+RL繩文	浅黄褐(10YR8/4)	9	細砂含	良		
4	C-3	口縁部	沈線+LR繩文	灰白(10YR8/2)	8	砂 粒	良		
5	E-2	口縁部	沈線+LR繩文	にぶい橙(7.5YR7/4)	8	砂 粒	良		
6	G-3	口縁部	沈線+LR繩文	墨(5YR7/6)	10	砂 粒	良		
7	B-3	胴部	沈線+LR繩文	浅黄褐(10YR8/3)	8	細砂含	良		
8	B-3	胴部	沈線+RL繩文	浅黄褐(10YR8/3)	9	砂 粒	良		
9	D-2	胴部	沈線+RL繩文	にぶい橙(5YR6/4)	6	砂 粒	良		
10	D-2	胴部	沈線+RL繩文	にぶい褐(7.5YR6/4)	5	砂 粒	良		
11	D-2	胴部	沈線+刺突文+RL	橙(5YR6/6)	7	砂 粒	良		
12	B-3	胴部	沈線+LR繩文	褐灰(10YR5/1)	6	砂 粒	良		
13	D-3	胴部	沈線+LR繩文	浅黄褐(10YR8/4)	9	砂 粒	良		
14	B-3	口縁部	沈線+RL繩文	にぶい橙(7.5YR6/4)	9	砂 粒	良		
18-15	D-3	口縁部	沈線+刺突文+RL	にぶい褐(7.5YR6/3)	9	砂 粒	良		
16	E-2	口縁部	沈線+LR繩文	褐灰(7.5YR5/1)	9	砂 粒	良		
17	D-3	胴部	沈線+LR繩文	浅黄褐(10YR8/4)	9	砂 粒	良		
18	D-3	胴部	沈線+RL繩文	浅黄褐(10YR8/4)	8	砂 粒	良		
19	D-3	胴部	沈線+LR繩文	浅黄褐(10YR8/4)	8	砂 粒	良		
20	D-3	胴部	沈線+刺突文+RL	にぶい黄褐(10YR8/4)	10	砂 粒	良		
21	E-2	胴部	沈線+刺突文+RL	灰黄褐(10YR4/2)	8	砂 粒	良		
22	H-3	胴部	沈線+LR繩文	浅黄褐(10YR8/3)	10	砂 粒	良		
23	N-2	口縁部	沈線	灰黄褐(10YR5/2)	7	砂 粒	良		
24	B-3	胴部	沈線+刺突文	にぶい黄褐(10YR7/4)	8	砂 粒	良		
25	N-2	口縁部	RL繩文	にぶい黄褐(10YR6/3)	6	砂 粒	良		
19-26	D-3	口縁部	LR繩文	にぶい赤褐(5YR4/4)	5	砂 粒	良		
27	D-3	口縁部	LR繩文	褐灰(10YR4/1)	7	砂 粒	良		
28	N-2	胴部	LR繩文	にぶい黄褐(10YR7/3)	7	砂 粒	良		
29	D-2	胴部	RL繩文	にぶい黄褐(10YR7/2)	12	砂 粒	良		
30	Q-3溝付近	胴部	LR繩文	灰黄褐(10YR6/2)	7	砂 粒	良		
31	D-3	口縁部	LR繩文+RL繩文	にぶい橙(7.5YR6/4)	8	砂 粒	良		
32	D-2	胴部	沈線	にぶい褐(7.5YR5/3)	8	砂 粒	良		
33	N-2	胴部	沈線	灰黄褐(10YR4/2)	6	砂 粒	良		



第21図 A区遺構外出土石器 (1)



第22図 A区遺構外出土石器 (2)

第6表 A区遺構外出土石器観察表

図版番号	R L番号	名称	出土地点	法量(mm)			重量(g)	石質
				最大長	最大幅	最大厚		
21-1	23-1	打製石斧	E-2	65	32	14	29	硬質頁岩
2	2	搔 器	B-2	63	19	10	12	硬質頁岩
3	3	搔 器	D-3	50	27	8	11	珪質頁岩
4	4	搔 器	J-3	32	21	9	11	珪質頁岩
5	5	搔 器	B-2	58	32	16	20	硬質頁岩
6	6	搔 器	B-2	42	40	16	31	黑色頁岩
7	7	搔 器	D-2	40	27	9	9	硬質頁岩
8	8	搔 器	B-2	43	36	17	28	硬質頁岩
9	9	搔 器	B-3	33	46	9	15	硬質頁岩
10	10	搔 器	B-2	98	38	19	79	黑色頁岩
11	11	搔 器	G-2	57	42	9	31	砂 岩
12	12	搔 器	B-3	32	34	8	18	硬質頁岩
13	13	搔 器	B-3	25	28	5	3	硬質頁岩
22-14	15	磨 石	Q-3	45	42	30	81	砂質礫灰岩
15	14	磨 石	E-2	32	13	15	6	泥質礫灰岩
16	16	磨 石	K-2	116	84	56	860	凝灰岩
17	17	磨 石	K-2	153	86	60	1,180	凝灰岩

2. B区の検出遺構と出土遺物

(1) 壁穴住居跡

第102号壁穴住居跡 (第23図)

調査区中央部、F・G-2グリッドのIV層上面において炉跡及び柱穴を確認した。想定される住居跡の規模は長軸5.64m、短軸4.66mを測り、楕円形を呈すると考えられる。主軸方向はN-52°-Eである。第108号土壙と重複し、本遺構が古い。柱穴は18個確認されたが、ピット1、2、7、11、14、18が主柱穴と考えられる。柱穴の規模は、径20~25cm、確認面からの深さは13~32cmを測る。炉は住居跡北東壁に接し、一部崩壊している。

構築時期は周辺出土遺物及び住居形態から縄文時代中期後期葉~末葉と考えられる。

第101号壁穴住居跡 (第24、27図、第7表)

調査区南東部A-3、B-3・4グリッドのIIIb層上面において確認した。規模は長軸4.2mを測り、長軸方向はN-11°-Eである。本住居は第103号溝状遺構と重複し、本住居が古い。南側壁、西側壁は床面よりほぼ垂直に、東側壁はやや外反しながら立ち上がる。壁高は20~30cmを測る。床面は平坦で堅くしまり、壁際には幅5~20cm、床面からの深さ10cm前後の壁溝が一巡している。カマドは、南壁ほぼ中央に設置されているが、崩壊が著しく、掘り方のみ確認できた。袖部には径50cm、深さ5cmの円形の掘り込みが確認された。

堆積土は4層の自然堆積と考えられる。

住居内から縄文土器片1点のみ出土したが、構築時期は平安時代と考えられる。

(2) 柱穴ピット (第25図)

調査区中央部から北東側にかけて確認し、その数は104個である。掘り方は円形、楕円形、不整形など種々あり、規模、径は一辺が10~30cm、深さ10~20cmとばらつきがみられる。柱穴内に石がつめられているものもみられる。第202号壁穴住居跡の他は柱配置は確認できなかった。

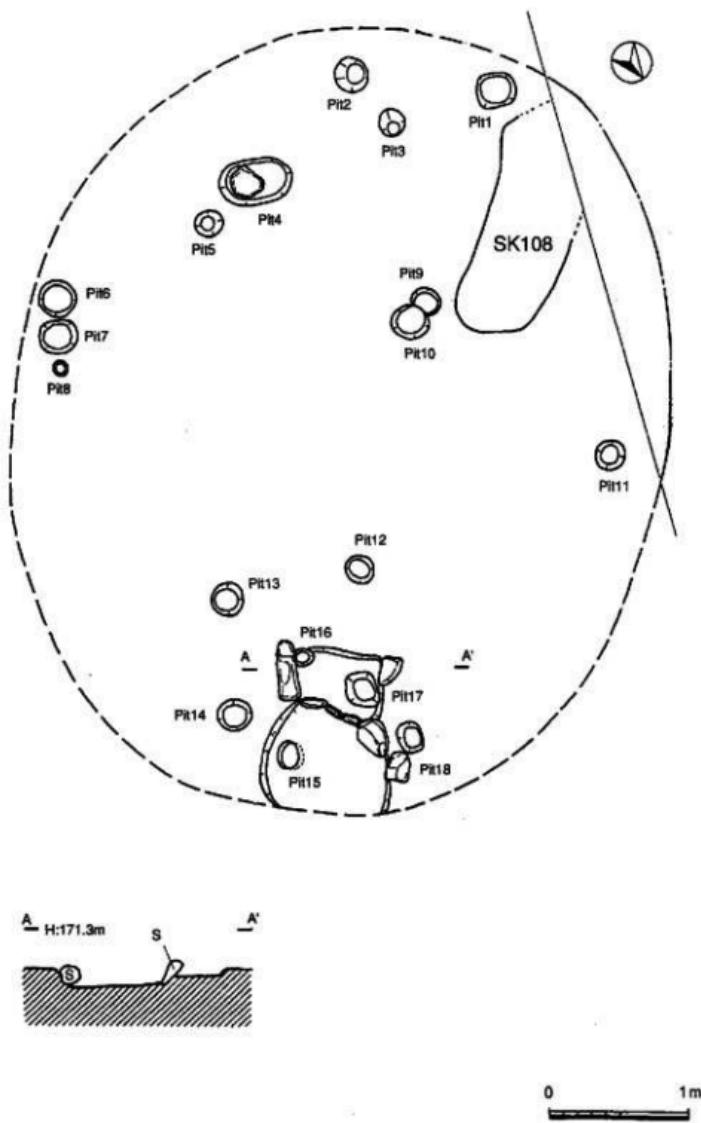
(3) Tピット (第26図)

第106号Tピット

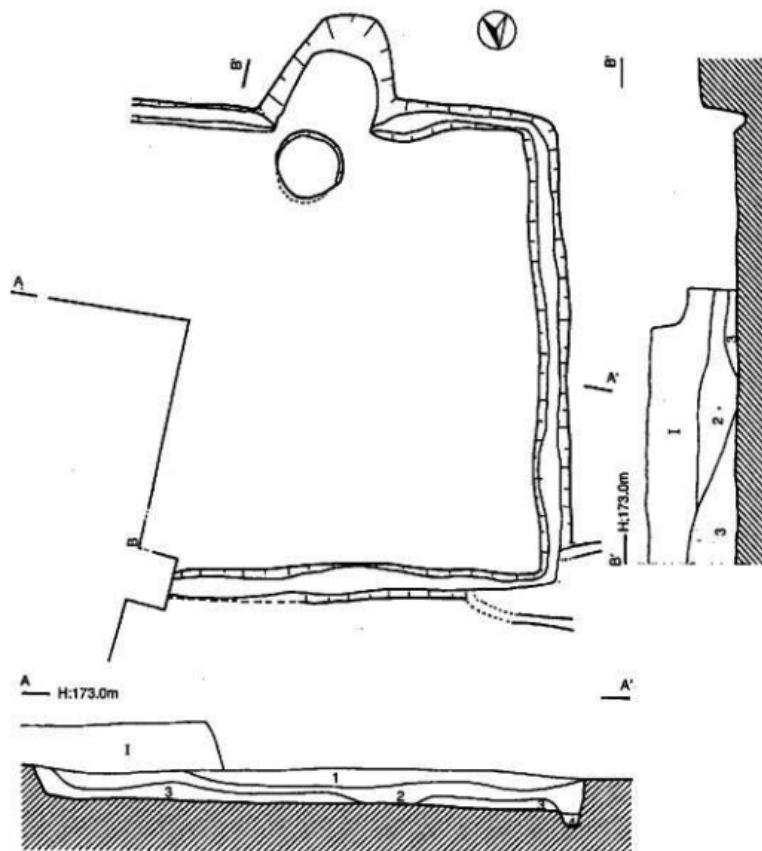
調査区北東端、B・C-2グリッドのIV層上面において黒色土の落ち込みを確認した。規模は長軸3m、短軸0.24m、確認面からの深さは0.98mを測る。長軸方向はN-34°-Wである。横断面はV字状を示す。

堆積土は6ブロックに分けられ、人為堆積と考えられる。

遺構内より遺物は出土しなかった。



第23図 第102号竪穴住居跡実測図



住居跡土層注記

- 1層 黒褐色土(10YR2/2)地山ブロック粒、火山灰少量炭化物微量混入軟弱はさばさしている
- 2層 黒褐色土(10YR2/2)地山ブロック粒、少景火山灰多量混入、軟弱はさばさしている
- 3層 黒褐色土(10YR2/2)地山ブロック少量、火山灰微量混入 やや軟弱
- 4層 黒色土(7.5YR1.7/1)地山ブロック粒少量、火山灰微量混入 軟弱



第24図 第101号竪穴住居跡実測図



第25図 B区柱穴状ピット配置図

(4) 土 壤

第101号土壤 (第26、28図、第8表)

調査区中央部、E-3グリッドのIIa層上面において確認した。径67cmの円形プランで、深さは90cmを測る。底面は平坦で堅くしめる。形態的にみて陥し状遺構とも考えられる。

堆積土は7ブロックに区分され、人為堆積と考えられる。

遺構内より搔器1点が出土し、構築時期は出土遺物より縄文時代と考えられる。

第102号土壤 (第26図)

調査区中央部、G-2グリッドのIV層上面において確認した。規模は長軸162cm、短軸76cm確認面からの深さは26cmを測る。平面形は長軸円形で、長軸方向はN-54°-Eである。本遺構は第102号竪穴住居跡と重複し、本遺構が新しい。V層を掘り込む壁は逆台形状を呈し、底面は平坦で堅くしめる。

堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積と考えられる。

遺構内より遺物は出土しなかったが、構築時期は周辺遺物から縄文時代中期末葉から後期前葉と考えられる。

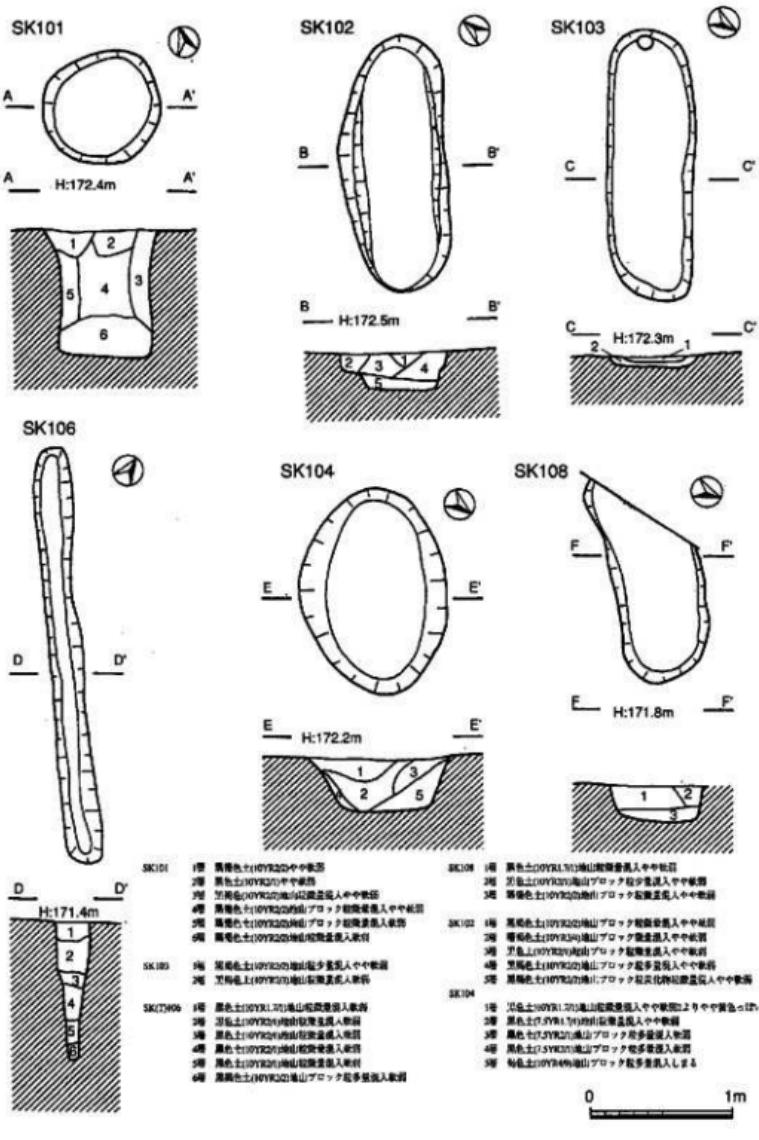
第103号土壤 (第26図)

調査区中央部、F・G-2、F・G-3グリッドのIV層上面において確認した。規模は長軸104cm、短軸64cm、確認面からの深さは8cmを測る。長軸方向はN-60°-Eで、平面形は長軸円形を呈している。

堆積土は2ブロックに分けられ、人為堆積と考えられる。

遺構内より遺物は出土しなかったが、構築時期は周辺遺物から縄文時代中期末葉から後期前葉と考えられる。

第104号土壤 (第26、27、28図、第8表)



第26図 第101~108号土壤実測図

調査区中央部、F - 2 グリッドのIV層上面で確認した。規模は長軸150cm、短軸104cm、確認面からの深さは36cmを測る。底面は平坦で堅くしまる。

堆積土は5層に区分され、人為堆積と考えられる。

遺構内より石窓1点、搔器1点、鋸形土製品1点が出土した。

構築時期は、遺構内出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

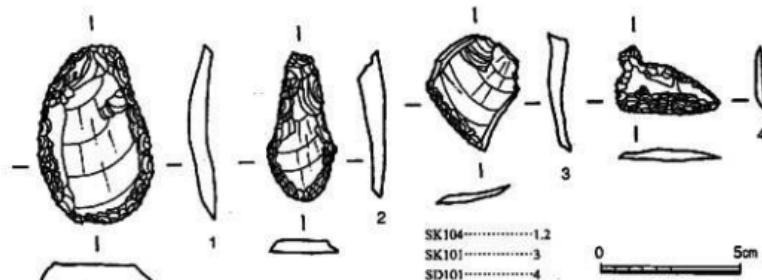
第108号土壤（第26図）

調査中央部、F・G - 2 グリッドのIV層上面で確認した。本遺構の一部は調査区域外におよんでいる。本遺構は第102号竪穴住居跡と重複し、本遺構が新しい。確認された長軸は122cm以上、短軸64cm、確認面からの深さは24cmである。平面形は長楕円形で、長軸方向はN-60°-Eである。

堆積土は3ブロックで人為堆積である。

第7表 B区遺構内出土土器観察表

図版番号	P L番号	出土地点	部位	外 面		器厚(mm)	胎土	焼成	備考
				文様	色調				
27-1	23-18	SI101	胴部	RL繩文	浅黄褐色(10YR8/4)	8	砂粒含	良	
2	21	SK104	刺突		にぶい褐(7.5YR5/3)	3	砂粒含	良	鋸形土製品



第28図 B区遺構内出土石器実測図

第8表 B区遺構内出土石器観察表

図版 番号	R L 番号	名称	出土地点	法量 (mm)			重量 (g)	石質
				最大長	最大幅	最大厚		
28-1	23-22	搔 器	SK104	64	40	7	30	硬質頁岩
2	23	石 篓	SK104	52	25	9	12	硬質頁岩
3	24	搔 器	SK101	41	33	6	9	硬質頁岩
4	25	石 匙	SD101	23	38	4	4	硬質頁岩

遺跡構内より遺物は出土しなかったが、構築時期は周辺遺物から縄文時代中期末葉から後期前葉と考えられる。

(5) 犬走り状遺構 (第29図)

調査区南東側斜面、C-4、D-3・4、G-3グリッドにトレンチを入れ確認した。平坦部は幅30~80cmを測り、調査区現地表面と犬走り状遺構の比高差は60cm前後である。

(6) 溝状遺構

第101号溝状遺構 (第28、30図、第8表)

調査区北東部から中央部にかけてのC・D・E・F-2グリッド、Ⅲa層上面において確認した。遺構北側は調査区外へ延びるため全容は明かでないが、長さ14m、幅0.6~0.8m、確認面からの深さは0.48mを測る。第102号溝状遺構と同時期のものと考えられる。

底面はやや鍋底状を呈し、壁は底面より垂直に立ち上がる。

堆積土は3層に区分され、自然堆積と考えられる。

遺構時期は、堆積土に浮石の混入が見られることから、平安時代以降と考えられる。

第102号溝状遺構 (第30図)

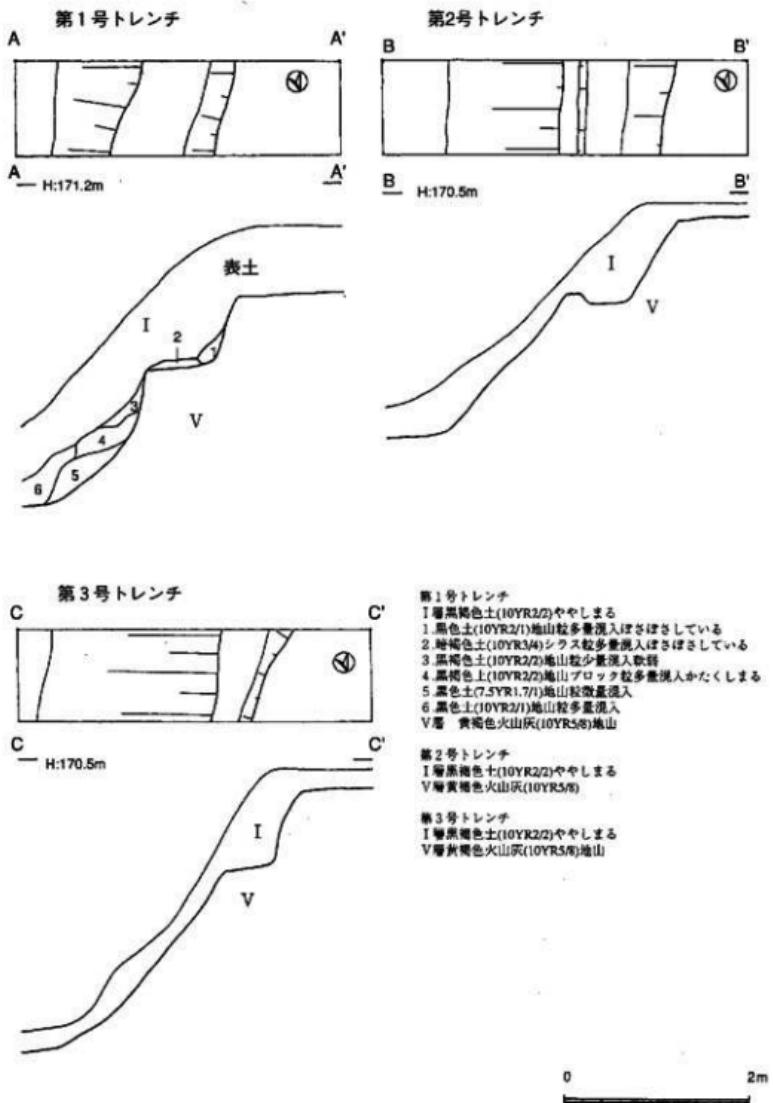
調査区北東部D-2グリッド、Ⅲa層上面において確認した。第101号溝状遺構と同時期のものである。遺構北西側は調査区外へ延びている。現存長2.8m、幅0.52m、確認面からの深さは0.08mを測る。底面は平坦でやや軟弱である。

堆積土は黒色土の単1層で、人為堆積と考えられる。

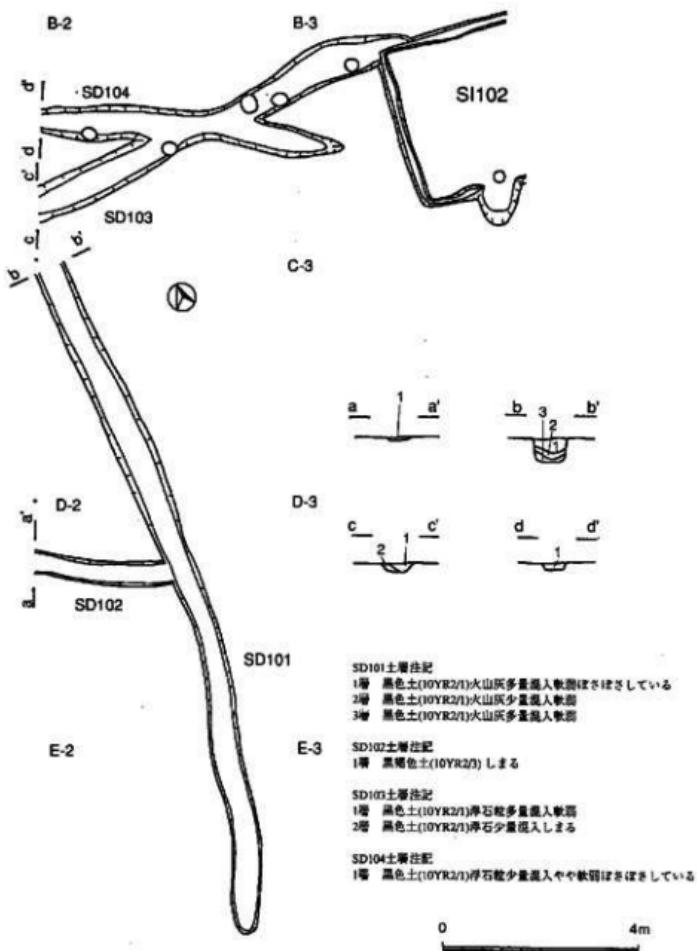
遺構内から遺物は出土しなかった。

第103号溝状遺構 (第30図)

調査区北東部B-2・3グリッド、Ⅲa層上面において確認した。本遺構は第101号竪穴住居跡、第104号溝状遺構と重複し、第101号竪穴住居跡より新しく、第104号溝状遺構との新旧関係は確認できなかった。遺構北西側は調査区外に延び、その全容は確認できないが、現存長は



第29図 大走り状遺構実測図



第30図 犬走り状遺構実測図

長さ8.4m、幅0.68~0.8m、確認面からの深さは0.2mを測る。底面は平坦でやや軟弱である。

堆積土は2層に区分され、自然堆積と考えられる。

遺構内から遺物は出土しなかったが、構築時期は堆積土の混入物から判断し、平安時代以降と考えられる。

第104号溝状遺構 (第30図)

調査区北東部B-2・3グリッド、1a層上面において確認した。遺構北西側は調査区外に延びているため全容は明かではないが、現存長6.2m、幅0.6~0.8m、確認面からの深さは0.16mを測る。

堆積土は1層に分けられ、自然堆積と考えられる。

遺構内から遺物は出土しなかったが、構築時期は堆積土の混入物から判断し、平安時代以降と考えられる。

(7) 遺構外出土遺物

土器 (第31~33図、第9表、10表)

遺構外からは、縄文時代中期~後期の復元土器4個体、縄文土器破片ダンボール箱1箱の出土があった。なお、土器観察表は第9、10表のとおりであった。

第I群 縄文時代中期の土器

1類…地文上に横位に沈線を施文する土器 (3)

地文上に横位に沈線を施文するもので、地文としてR L縄文が施文される。焼成は良好で、色調は褐色である。

2類…地文上に縱位に沈線を施文される土器 (11、12)

地文上に縱位に沈線を施文するもので、地文としてR L縄文が施文される。焼成は良好で色調は、橙色、にぶい橙色である。

3類…磨消縄文が施文される土器 (1~10)

a. 磨消縄文による「匂」文や縦位捺円形文の組み合わせた文様を主文様とするもので、深鉢が主体を占める。沈線内にはR L、L R縄文が充填される。焼成は良好で、色調はにぶい橙色である。(8~10)

b. 磨消縄文による波状文を横位方向に施文する土器で、沈線内にはL R縄文が充填される。焼成は良好で、色調はにぶい橙色、灰褐色である。(1~7)

本群1類は円筒上層e式、3類aは大木9式、3類bは大木10式土器に比定される。2類は大木9式に並行するものと考えられ、中ノ平III式土器の特徴をもっている。

第II群 後期前葉の土器

1類…無文地に沈線が施文される土器（14）

無文地に沈線が施文される土器で、椭円形が施文されている。焼成は良好で、色調はにぶい橙色である。

第Ⅲ群 後期末葉～晩期初頭の土器（15、16）

深鉢形土器がみられる。主文様として入組文が施文され沈線間にはL R 繩文が充填されている。口唇部には刻み目が連続的に押圧されている。焼成は良好で、色調はにぶい橙色である。

第Ⅳ群 中期中葉～晩期初頭の土器（17～27）

単節繩文、撚糸文、条痕文、無文土器を一括した。本群土器は深鉢形土器が主体を占めるが無文土器において壺形土器もみられる。1は波状口縁を有する小型の深鉢でR L 繩文が施文されている。焼成は良好で、色調はにぶい橙色である。

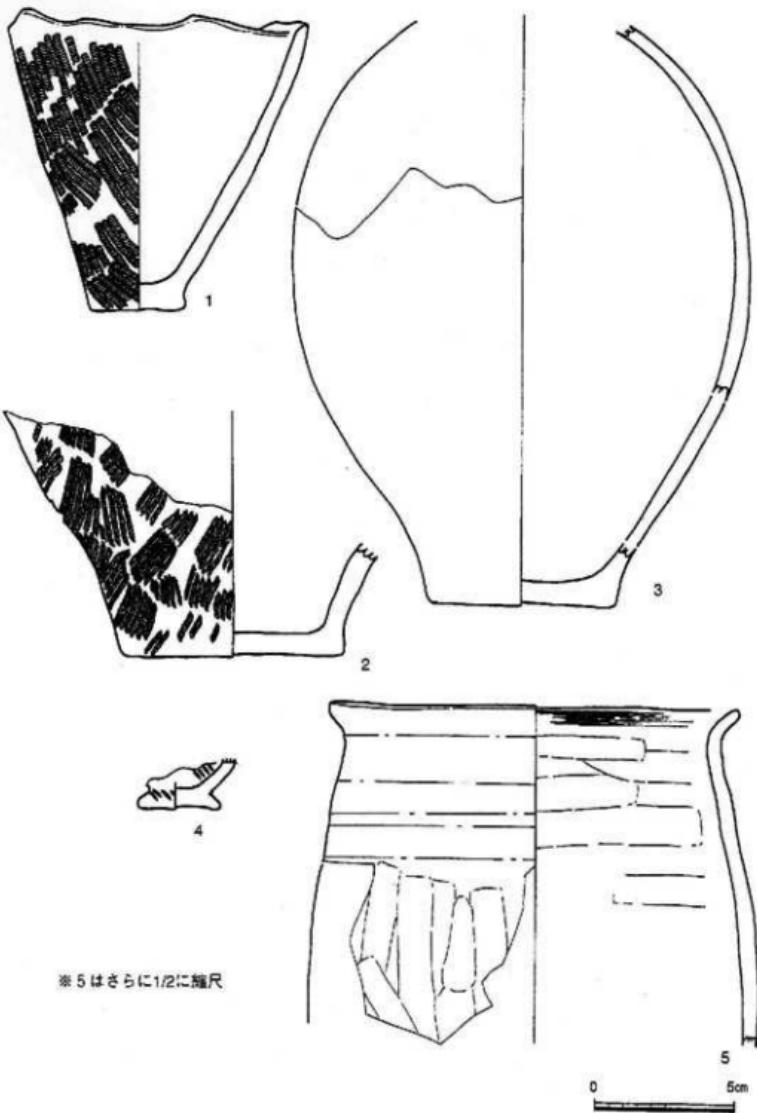
土師器（第31図、第9表）

5は壺形土師器で口縁部は短く外反する。器外面には範ナデと水挽き調整が、内面には刷毛目状痕が観察される。

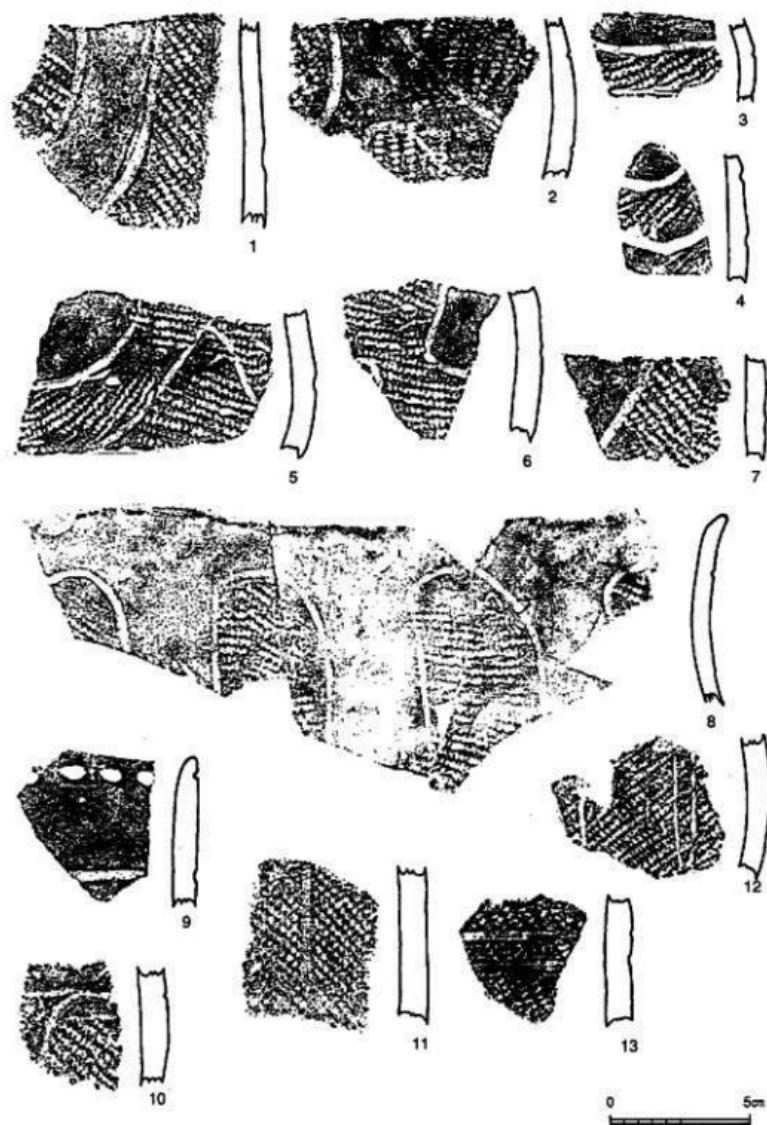
石 器（第34図、第11表）

B区遺構外から出土した石器は石鏃1点、搔器8点、磨石4点、砥石1点である。

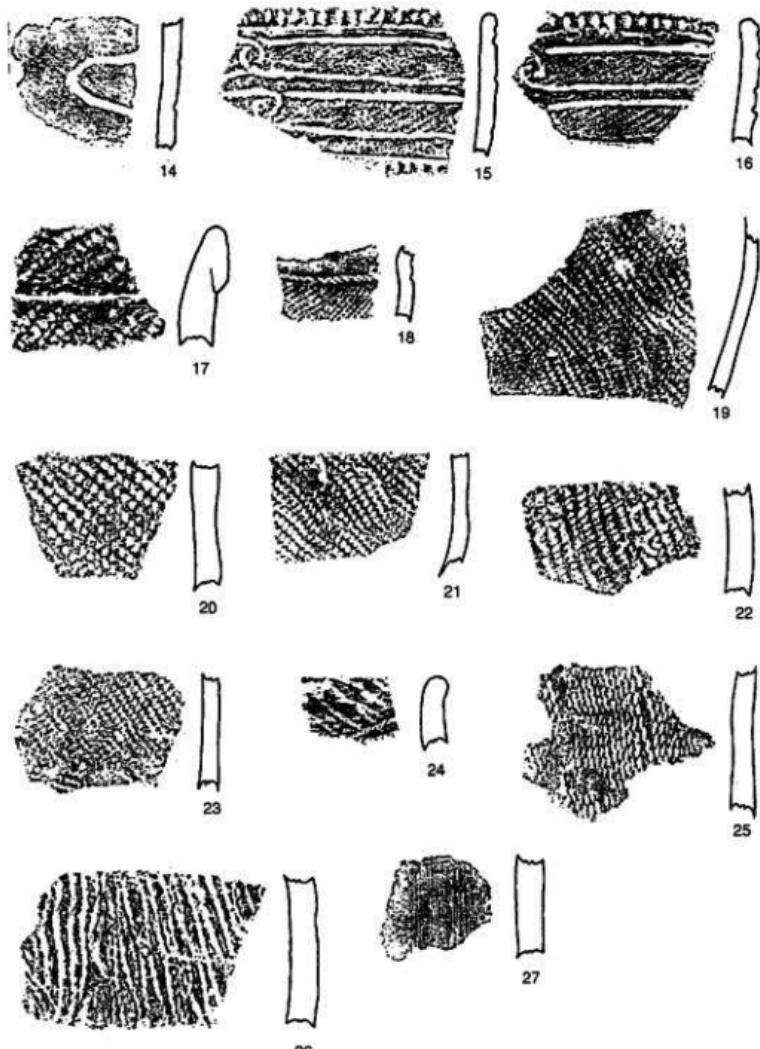
1は凹基無茎石鏃で長さ3.3cm、幅1.7cm、重さ2 gを測り、石材は珪質頁岩である。2～9は搔器で長さは2.6～9.6cm、幅2～7.3cm、重さ2～81gを測り、石材は硬質頁岩が多く、頁岩、砂岩である。10～13は磨石で長さ8.6～11.7cm、幅7.5～8.3cm、重さ532～725 gを測り、石材は砂質凝灰岩である。12は、使用後凹石として使用されている。14は砥石で石材は泥質灰岩である。



第31図 B区造構外出土土器実測図



第32図 B区遺構外出土土器拓影図 (1)



0 5cm

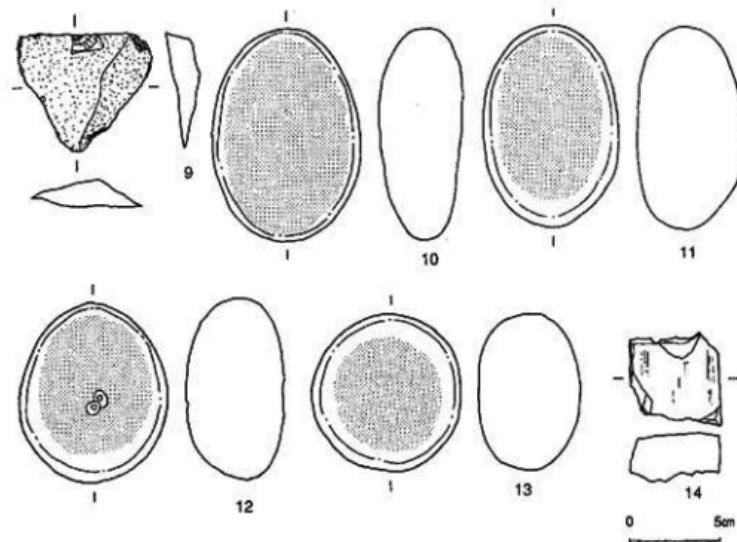
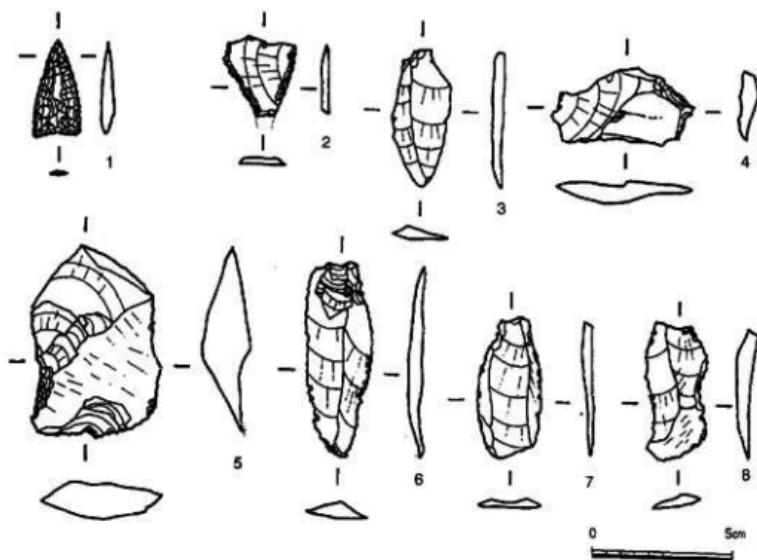
第33図 B区遺構外出土土器拓影図 (2)

第9表 B区遺構外出土土器観察表

図版番号	P L番号	出土地点	部位	外 面		器厚 (mm)	胎 土	焼成	備 考
				文 様	色 調				
31-1		E-1	完形	繩文(RL)	に赤い黄褐色(10YR6/3)	7	細砂含	良	赤色顔料付着
2		E-2	底部	繩文(LR)	に赤い黄褐色(10YR7/3)	8	細砂含	良	
3		D-2		無文	に赤い黄褐色(10YR7/4)	5	細砂含	不良	壺
4		C-3	底部	繩文(RL)	橙(5YR6/6)			良	ミニチュア土器
5		B-3			に赤い黄褐色(10YR5/3)	11	砂粒含		土師器

第10表 B区遺構外出土土器観察表

図版番号	P L番号	出土地点	部位	外 面		器厚 (mm)	胎 土	焼成	備 考
				文 様	色 調				
32-1		D-3	胴部	磨消繩文(LR)	に赤い褐色(7.5YR5/3)	6	細砂含	良	
2		C-3	胴部	沈縁+磨消繩文(LR)	灰褐色(10YR5/2)	8	砂 粒	良	
3		E-2	胴部	沈縁+磨消繩文(LR)	灰褐色(10YR5/2)	5	砂 粒	良	
4		B-3	胴部	沈縁+磨消繩文(LR)	橙(5YR7/6)	6	砂 粒	良	
5		C-3	胴部	沈縁+LR+RL	に赤い橙(7.5YR6/4)	9	砂 粒	良	
6		C-3	胴部	沈縁+磨消繩文(LR)	灰褐色(10YR5/2)	10	砂 粒	良	
7		D-3	胴部	沈縁+磨消繩文(LR)	に赤い黄褐色(10YR5/5)	7	砂 粒	良	
8		C-3	口縁部	沈縁+磨消繩文(LR)	に赤い橙(7.5YR6/4)	7	砂 粒	良	
9		C-3	口縁部	沈縁+削突式	に赤い褐色(7.5YR5/3)	8	砂 粒	良	
10		D-2	胴部	沈縁+磨消繩文(LR)	浅褐色(10YR4/4)	10	砂 粒	良	
11		B-2	胴部	磨消繩文(RL)	橙(7.5YR7/6)	13	砂 粒	良	
12		C-3	胴部	沈縁+磨消繩文(LR)	に赤い黄褐色(10YR5/3)	8	砂 粒	良	
13		C-2	胴部	沈縁+磨消繩文(RL)	褐色(7.5YR4/1)	10	砂 粒	良	
33-14		H-2	胴部	沈縁	に赤い橙(7.5YR6/4)	6	砂 粒	良	
15		C-3	口縁部	沈縁+磨消繩文(LR)	に赤い黄褐色(10YR6/3)	7	砂 粒	良	
16		C-2	口縁部	沈縁+磨消繩文(LR)	に赤い黄褐色(10YR6/3)	7	砂 粒	良	
17		C-3	口縁部	磨消繩文(LR)	に赤い黄褐色(10YR7/4)	12	砂 粒	良	
18		B-3	胴部	磨消繩文(LR)	に赤い橙(7.5YR6/4)	5	砂 粒	良	
19		C-3	胴部	磨消繩文(RL)	橙(7.5YR7/6)	6	砂 粒	良	
20		A-3	胴部	磨消繩文(RL)	橙(7.5YR5/6)	10	砂 粒	良	
21		C-2	胴部	磨消繩文(RL)	に赤い黄褐色(10YR6/3)	6	砂 粒	良	
22		B-2	胴部	磨消繩文(RL)	浅褐色(7.5YR8/6)	9	砂 粒	良	
23		D-2	胴部	磨消繩文(RL)	橙(5YR6/6)	6	砂 粒	良	
24		E-2	口縁部	擦 系(RL)	に赤い黄褐色(10YR6/4)	8	砂 粒	良	
25		B-2	胴部	磨消繩文(RL)	浅褐色(10YR8/4)	8	砂 粒	良	
26		D-3	胴部	磨消繩文(RL)	に赤い褐色(7.5YR5/4)	11	砂 粒	良	
27		C-2	胴部	条 痕	に赤い橙(7.5YR7/4)	10	砂 粒	良	



第34図 B区遺構外出土石器・石製品実測図

第11表 B区遺構外出土石器觀察表

図版 番号	R L 番号	名称	出土地点	法量 (mm)			重量 (g)	石質
				最大長	最大幅	最大厚		
34-1	25- 9	石鎚	J-2	33	17	3	2	珪質頁岩
2	10	搔 器	D-3	27	25	3	2	硬質頁岩
3	11	搔 器	C-3	48	20	4	7	硬質頁岩
4	12	搔 器	B-2	26	50	7	11	硬質頁岩
5	13	搔 器	D-2	63	43	17	54	砂 岩
6	14	搔 器	C-3	69	23	6	10	硬質頁岩
7	15	搔 器	C-3	47	23	3	8	硬質頁岩
8	16	搔 器	C-2	50	22	6	9	硬質頁岩
9	17	搔 器	C-3	64	73	13	81	頁岩
10	18	磨 石	D-2	117	82	46	620	砂質凝灰岩
11	19	磨 石	C-3	111	75	57	725	凝灰岩
12	20	磨 石	D-2	99	83	54	605	砂質凝灰岩
13	21	磨 石	D-3	86	81	56	532	砂質凝灰岩
14	22	砥 石	E-2	(47)	(49)	(25)	69	泥質凝灰岩

1. C区検出遺構と出土遺物

(1) 壁穴住居跡 (第35~38図、第12表)

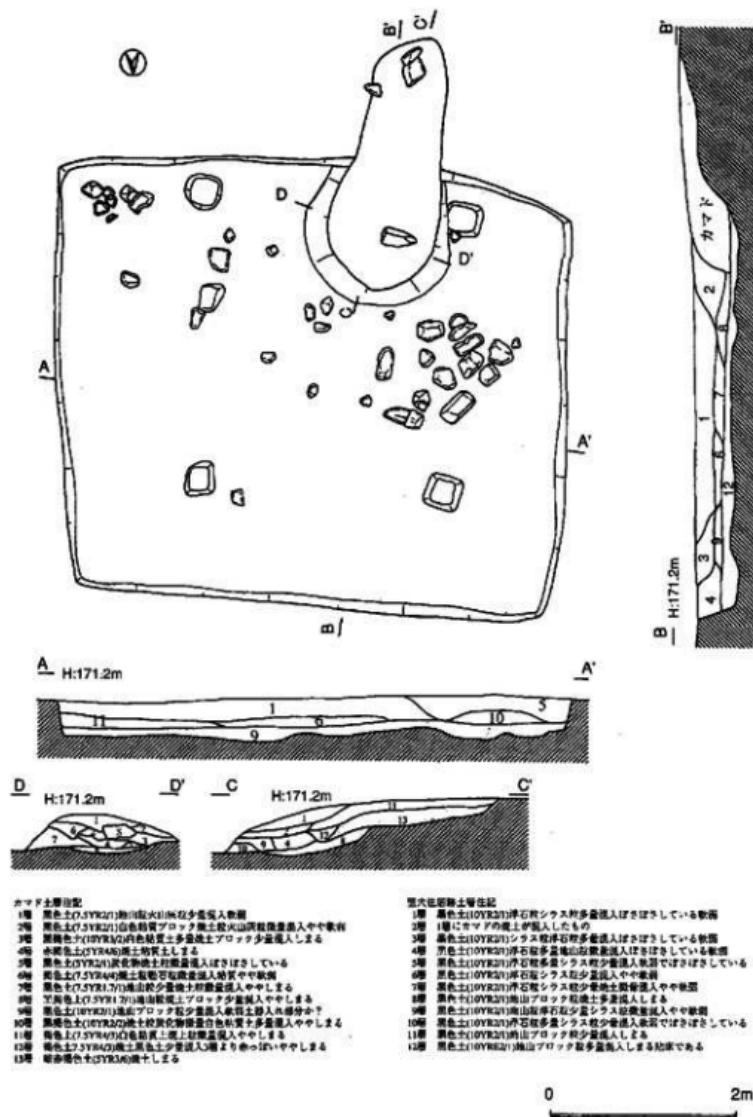
第301号壁穴住居跡

調査区北部ZZ・A-1、ZY・ZZ・A-2グリッドのII層上面において確認した。長軸6.26m、短軸5.5mを測る方形プランである。長軸方向はN-15°-Wである。堆積土は11ブロックに区分され、人為堆積と考えられる。V層まで掘り込まれる壁は、床面よりやや外反しながら立ち上がり、壁高は32~40cmを測る。床面には厚さ6~20cmの貼床が施されている。

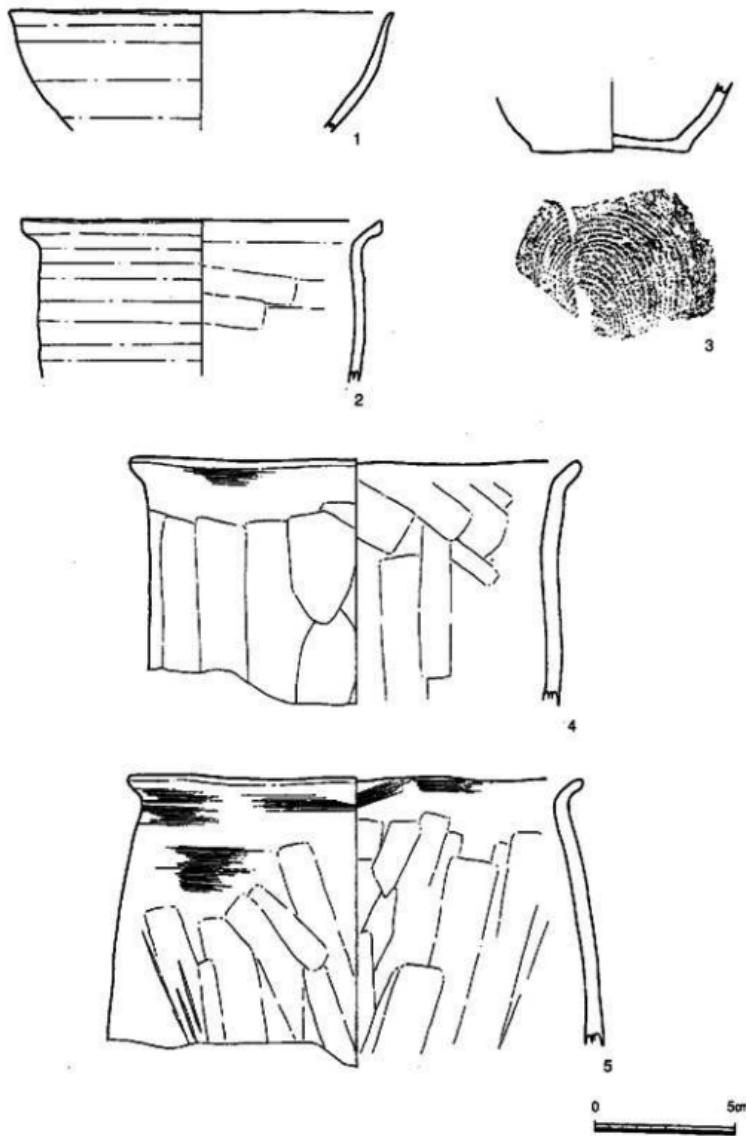
4個のピットが確認された。これらの柱穴は一辺35cm前後の方形を呈し、深さは30cm前後である。カマドは南西側壁の西側寄りに設置されている。袖部には深さ8cm程に掘り込みが確認され、芯材を設置したものと考えられ、外傾しながら立ち上がる。

住居内より復元・図上復元された土師器6個体の他、土師器片417点、須恵器片2点が出土した。1は杯で器外面には水挽き調整が、内面には黒色処理がなされている。2は壺で口縁部は短く外反し、器外面には水挽き調整が施されている。3は壺の底部で回転糸引きである。4は壺で器外面には範ナデ調整が、内面にはハケ目調整が施されている。5は壺で器外面には範ナデ調整及び口縁部には指ナデ調整が施されている。6、7は壺で7は口縁部が大きく外反している。器外面には範ナデと水挽き調整が、内面には刷目状痕が観察される。8は須恵器壺の肩部破片で外面に単輪絞状帯のタタキ目痕がみられる。

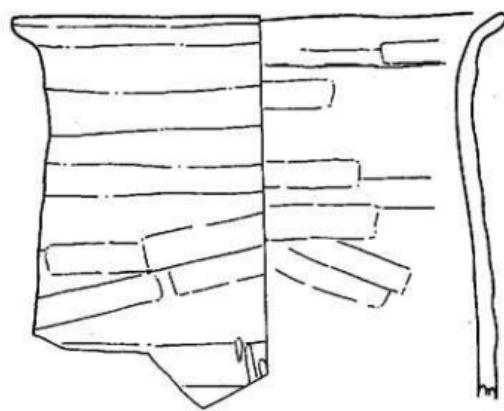
(花海 義人)



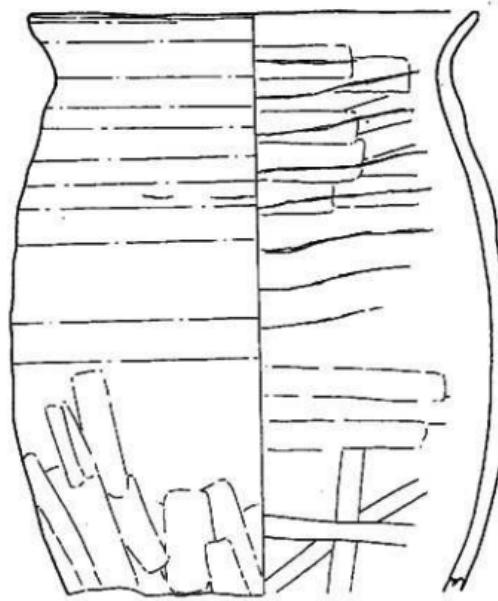
第35図 第301号竖穴住居跡実測図



第36図 第301号竪穴住居跡出土土器実測図 (1)



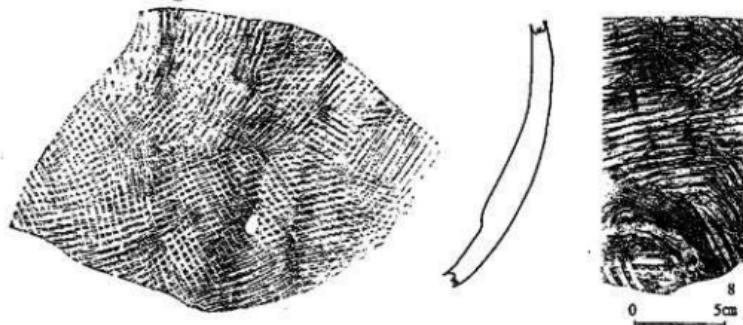
6



7



第37図 第301号竪穴住居出土土器実測図 (2)



第38図 第301号竪穴住居跡出土土器拓影図

第12表 第301号竪穴住居跡出土土器観察表

図版 番号	P L 番号	出土地点	容種	外 面		器厚 (mm)	胎 土	焼 成	備 考
				文 様	色 調				
36-1	26-1	SI301	壺	水挽き	褐(10YR4/4)	4		良	黒色処理
2	2	SI301	壺	水挽き	橙(5YR6/6)	4	砂粒含	良	
3	4	SI301 <small>ガラフ</small>	壺	水挽き	橙(5YR6/6)	4	砂粒含	良	2と同一個体
4		SI301	壺	ヘラナデ	にぶい褐(7.5YR5/3)	8	砂粒含	良	
5		SI301	壺	ヘラナデ+ハケ目	橙(5YR6/6)	9	砂粒含	良	
37-6	5	SI301	壺	ヘラナデ+水挽き	にぶい黄褐(10YR7/3)	8	砂粒含	良	
7	6	SI301	壺	ヘラナデ+水挽き	にぶい黄褐(10YR7/3)	9	砂粒含	良	
38-8	7	SI301	壺	タキ目	暗青灰(5B4/1)	16		良	

第IV章 調査のまとめ

花輪古館跡は、鹿角市花輪字古館、字福土川、字陳場に所在する中世の館跡である。鹿角四十二館の一つ、臥牛本館と考えられ、代々安保姓花輪氏が館主であったと伝えられている。

館跡は福上川右岸の標高168～176mの舌状台地、陳場平の南端部に位置し、空堀により区画された2つの郭とそれらの郭の北側に隣接する台地とから成る。

この度の調査は、市道高井田西町線並びに市道横丁東山線の整備工事に伴う緊急調査であり、本工事により、消失する3地点（A～C区）がその対象であった。

A区からは、掘立柱建物跡1棟、柱穴状ビット229個、土壙7基、溝状遺構1条が検出され、縄文時代中期、後期の土器、石器、平安時代の須恵器、古代～中世の鉄製品、中世の陶磁器、古錢の出土があった。

柱穴ビットとしたものの半数近くは、掘立柱建物の柱穴と考えられるが、調査区が縦長いこともあり、その柱配列を確認できたのは第201号掘立柱建物跡1棟のみであった。しかし、同建物跡にても、その半分以上が調査区域外に延びているため、形態、規模、構築時期等、については明らかにできなかった。本調査区に近接する御休堂遺跡では平安時代の掘立柱建物跡14棟が検出されているが、本遺跡建物跡との関連が考えられる。

土壙は中央部と南西部に偏在している。土壙内からの出土遺物は少ないが、遺構確認面や堆積状況から中央部に位置する土壙は、第203号土壙が平安時代から中世、他の3基縄文時代中期～後期の構築と考えられる。また、南西部の土壙は3基とも平安時代～中世の構築と考えられる。

前述のように、A区からは確実に館期に位置づけられる遺構は検出されていない。しかし、11～12世紀の白磁碗、古錢（景德元宝・初鑄1008年）の出土があり、平安時代～中世とした遺構や掘立柱建物跡が館期にまで下る可能性がある。

B区からは、堅穴住居跡2棟、柱穴状ビット104個、Tビット1基、土壙5基、犬走り状遺構1条、溝状遺構4条が検出され、縄文時代中期、後期の土器、石器、土製品、平安時代の土師器の出土があった。

堅穴住居跡2棟のうち1棟、第101号堅穴住居跡は、長軸4.2mの方形プランで、南壁は中央にカマドが構築されている。本住居跡の構築時期を推察できる遺物の出土はないが、その確認面及び堆積状況から平安時代後半の構築と考えられる。また、第102号堅穴住居跡は、ほとんど地山を掘り込んでいないため、その壁を確認できなかったが、長軸5.6m、短軸4.7mの梢円形プランと考えられる。本住居跡については、炉跡の形態及び周辺の出土遺物より縄文時代中期後～末葉の構築と考えられる。

B区からも104個の柱穴状ピットが検出されたが、調査区が細長いことに加え、地山面にまで擾乱が及んでいる所が多いことから、建物跡としての柱配置を明らかにできなかった。

本調査区から検出されたTピット、土壌はいずれも縄文時代に位置づけられるもので、第104号土壌は後期前葉、第102、103、108号土壌は中期末葉～後期前葉の構築と考えられる。後者の土壌群は、その形態、規模、長軸方向、配置等から同時期の可能性がある。

B区の検出遺構及び出土遺物のはほとんどは、縄文時代か平安時代に位置づけられたもので、館期と考えられるのは、I、II郭間の空堀に添うように確認された犬走り状遺構のみである。

B区の位置するIII地区は主郭（I郭）に隣接する地区であり、館期にも利用されていたと考えられる。今回の調査地はIII地区の東端の小範囲であり、同地区の全容について未堀部分の発掘調査を待たなければならない。

C区からは、平安時代の堅穴住居跡1棟が検出され、同住居内より土師器、須恵器の出土があった。

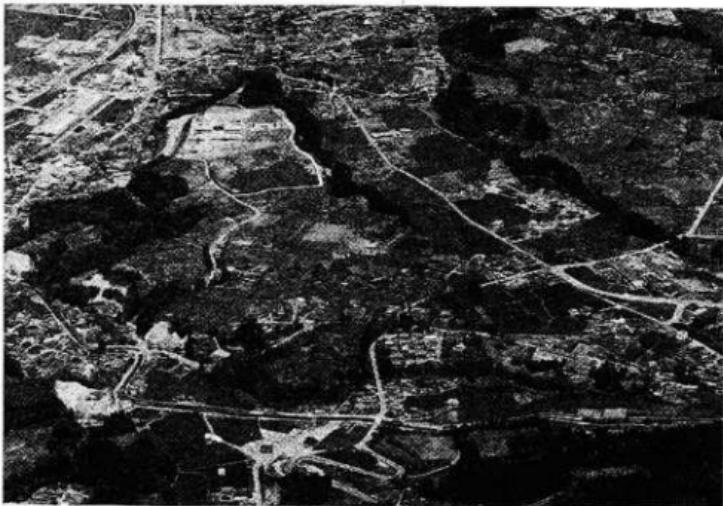
この堅穴住居跡は、方形プランで63m×55mの規模である。南西壁の西側寄りにカマドが構築されている。また、柱穴は各壁隅寄りから確認されている。第II層の大湯浮石層下まで擾乱されており、本住居跡が確認されたのはIIa層上面においてであったが、覆土の堆積状況及び出土遺物より、本住居跡の構築時期は大湯浮石降下以降、平安時代後半と考えられる。

C区からは、1棟の平安時代の堅穴住居跡が検出されたのみで、他の遺構は確認されていない。しかし、分布密度は低いものの、周辺に平安時代の遺構が分布している可能性は高い。ただ、C区の位置する地区が館期にも使用されていたということは、今回の調査で同期の遺構、遺物とも確認されず、否定的に成らざるを得ない。

（秋元 信夫）

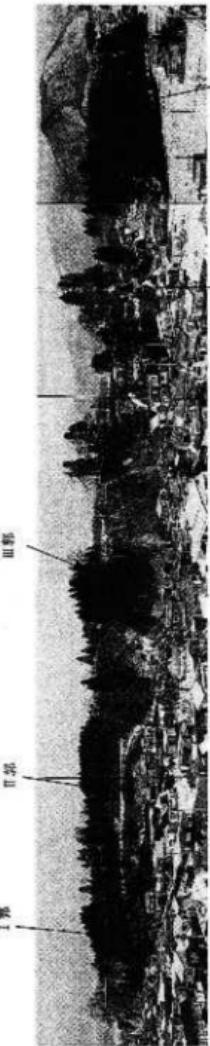
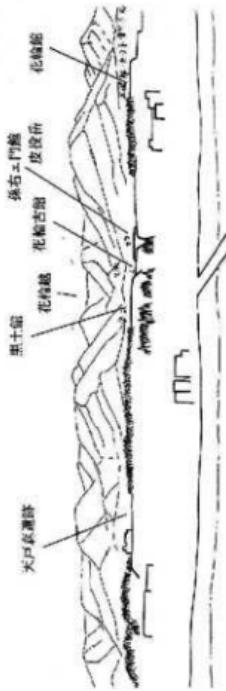
参考・引用文献

- 安村 二郎 「鹿角地方の城館－航空写真測量調査に関して－」
『よねしろ考古』第4号 1988年
- 小松 正夫 「秋田県の土師器について」『考古風土記』第2号 1977年
- 桜田 隆 「鹿角地方の城館－考古資料より－」『よねしろ考古』第4号 1988年
「鹿角盆地に於ける古代土器群の様相（I）」
『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』 1987年
- 鈴木 克彦 「東北地方北部に於ける大木系土器文化の縦年的考察」『北奥古代文化』第8号
- 富樫 泰時・安村 二郎 他 「日本城館大系2」 新人物往来社 1980年
- 本間 宏 「縄文時代後期初頭土器群の研究（1）」『よねしろ考古』第3号 1987年
「縄文時代後期初頭土器群の研究（2）」『よねしろ考古』第4号 1988年
- 青森市螢沢遺跡発掘調査団 「螢沢遺跡－青森市新田地造成計画に基づく戸山团地
予定地内螢沢遺跡緊急発掘調査報告書－」 1979年
- 青森県教育委員会 「中の平遺跡発掘調査報告書」 1974年
- 秋田県教育委員会 「秋田県の中世城館」 1981年
『中田面遺跡発掘調査報告書』 1980年
- 鹿角市 「鹿角市史 第1巻」 1982年
- 鹿角市教育委員会 「御休堂遺跡発掘調査報告書」 1981年
『新斗米館跡 第II次発掘調査報告書』 1981年
『天戸森遺跡発掘調査報告書』 1981年
『鹿角の館 館跡航空写真測量調査報告書（5）』 1981年
『花輪館跡試掘調査報告書（2）』 1981年
『小枝指館跡発掘調査報告書』 1992年
『地羅野館跡発掘調査報告書』 1992年
『赤坂B遺跡発掘調査報告書』 1993年



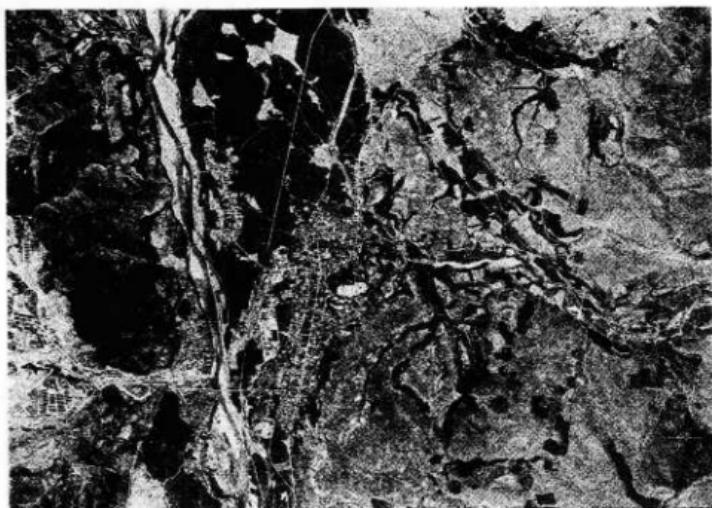
P L 1 花輪古館跡全景

〔鹿角の館 5〕より転載

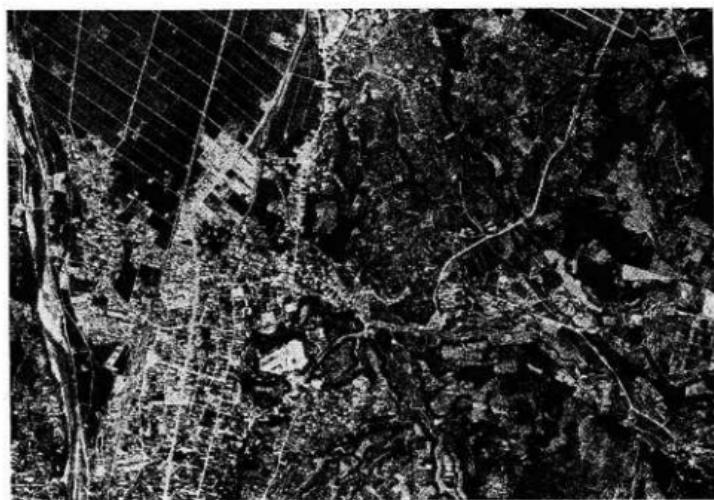


※「花角の越5」より撮影

P L 2 花輪古館遠景



昭和20年代の花輪古館跡周辺



昭和48年の花輪古館跡周辺

P L 3 花輪古館跡航空写真



花輪古館跡遠景



花輪古館跡遠景



III郭よりI郭を望む

P L 4 花輪古館跡遠景、近景



白山堂を望む



I 郡北側の空堀



I、III 郡間の空堀全景

P L 5 花輪古館跡近景



I、III郭間の空堀（中央部）



I、III郭間の空堀（N→S）

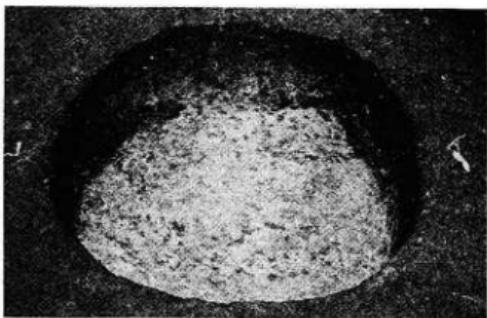


I、III郭間の空堀（N→S）

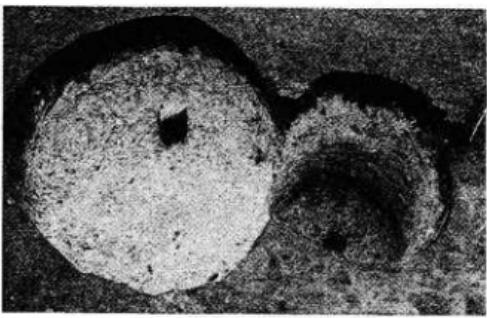
P L 6 花輪古跡跡近景



A区近景

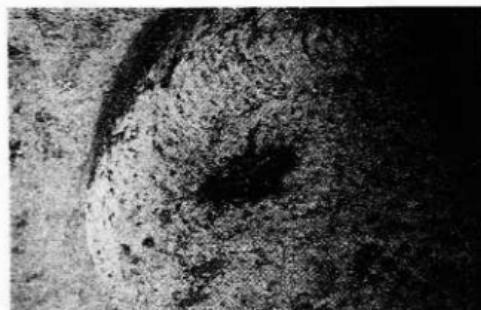


第201号土壤

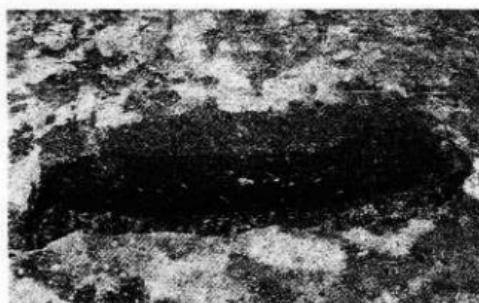


第203、204号土壤

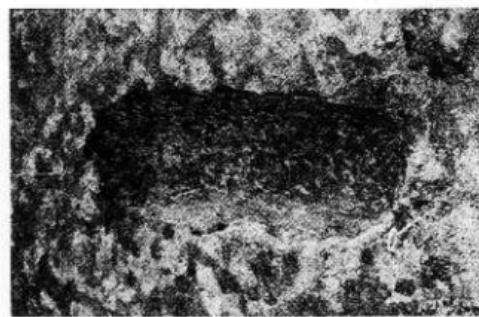
P L 7 第201~204号土壤



第203号土壤遗物出土状况



第205号土壤断面

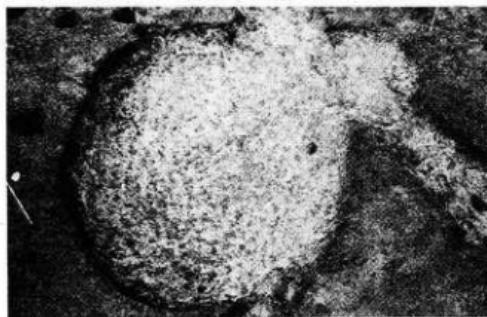


第205号土壤

P L 8 第203、205号土壤



第207号土壤



第207号土壤



第209号土壤

P L 9 第207、209号土壤



A区近景



调查风景

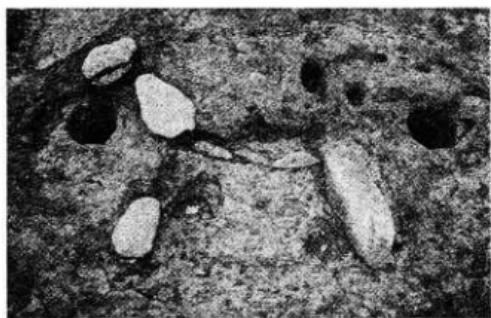


基本层序

P L 10 A区近景、基本层序



第102号竖穴住居跡

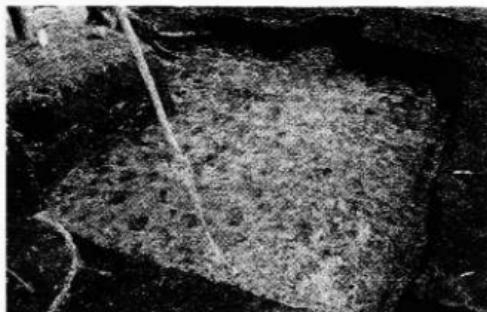


第102号竖穴住居石面炉



調查風景

P L 11 第102号竖穴住居跡



第101号竪穴住居跡

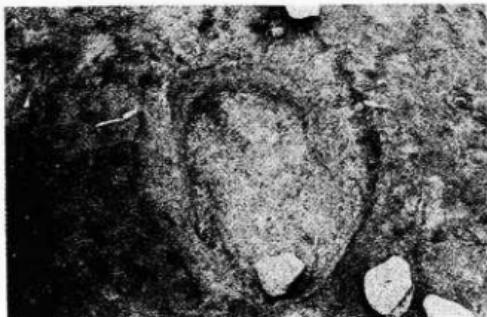


第101号竪穴住居跡

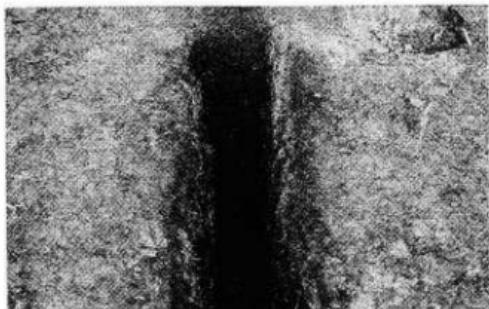


第101号竪穴住居跡

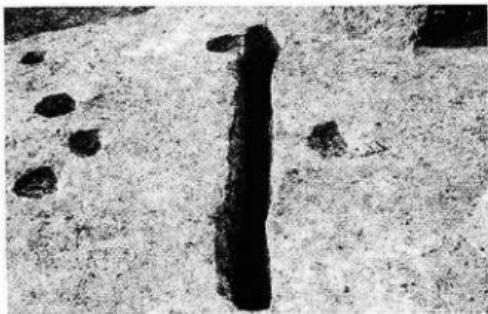
P L 12 第101号竪穴住居跡



第104号土壤



第106号Tビット



第106号Tビット

P L 13 第104号土壤、106号Tビット



第104号溝状遺構



第101号溝状遺構



第103号溝状遺構

P L 14 溝状遺構土層断面



溝状遺構全景

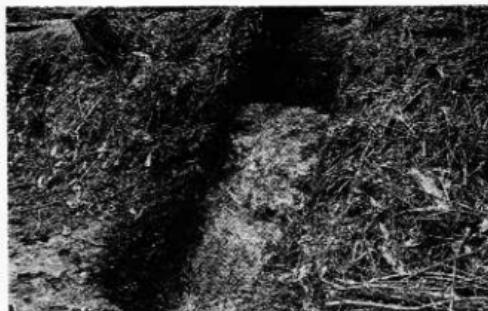


第103、104号溝状遺構



1号トレンチ（犬走り状遺構）

P L 15 溝状遺構、犬走り状遺構



2号トレンチ（犬走り状遺構）



3号トレンチ（犬走り状遺構）



A区全景

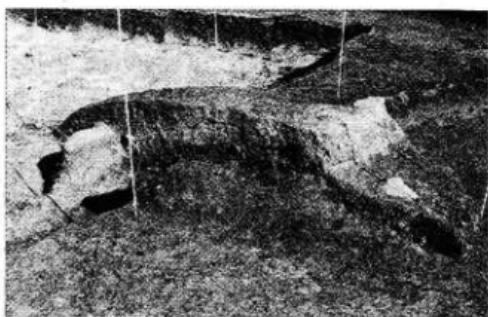
P L 16 犬走り状遺構、A区近景



C区全景



第301号竪穴住居跡



第301号竪穴住居跡カマド

P L 17 C区近景、第301号竪穴住居跡



C区第301号竖穴住居跡 (N→S)



A区調査終了 (S・N)

P L 18 C区第301号竖穴住居跡、A区全景



B区調査終了 (NE→SW)



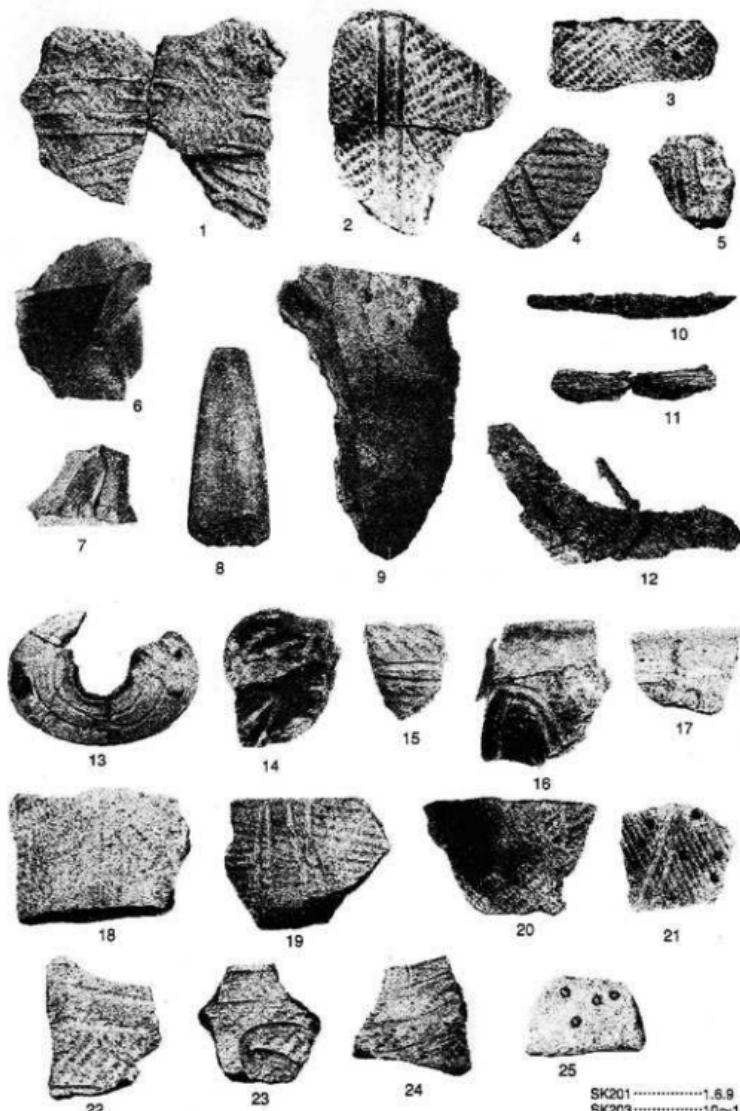
B区調査終了 (NE→SW)

P L 19 A区・B区全景



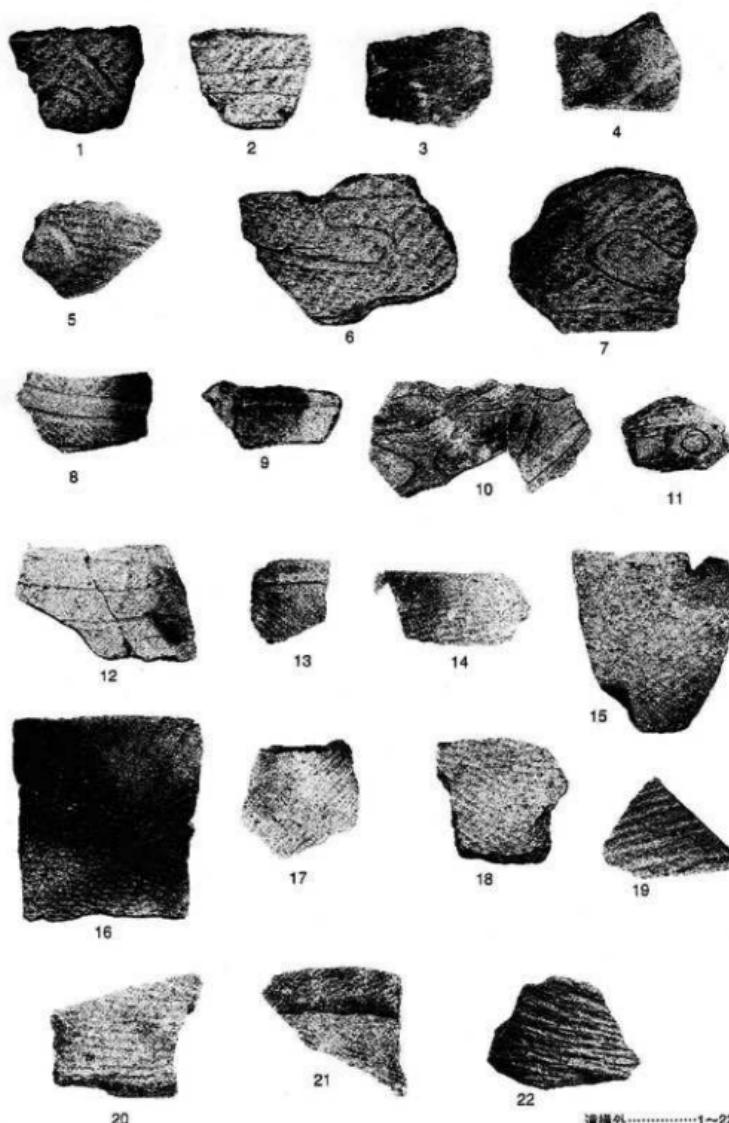
(天正四年、1739年・盛岡市中央公民館蔵)
中央上、白山周辺が花輪古跡

P L 20 花輪通御代官所御絵図



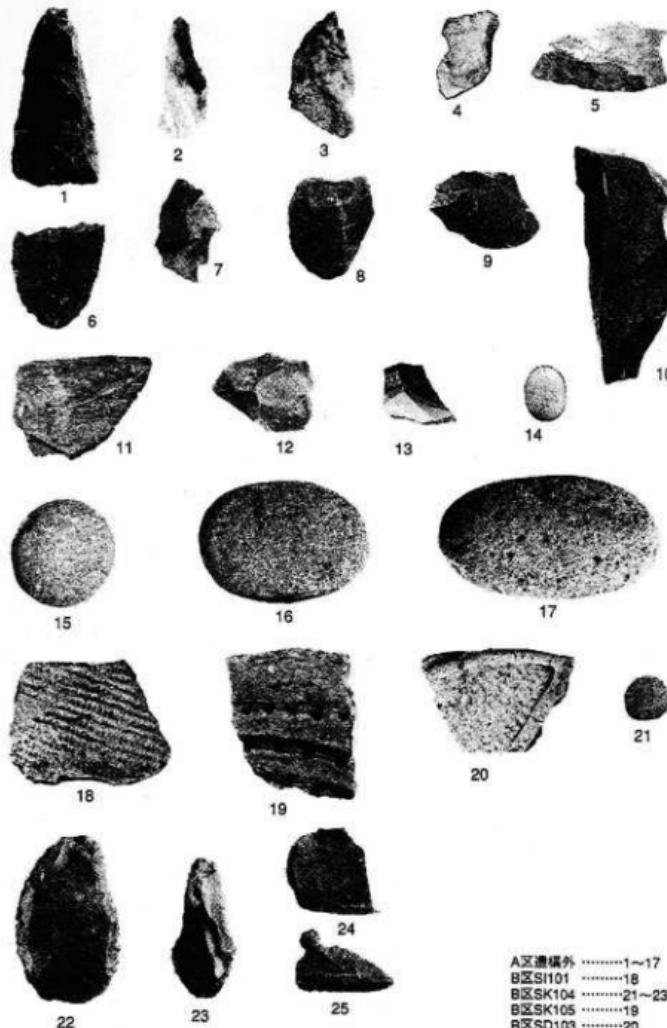
P L 21 A区造構外出土遺物

SK201	1.6.8
SK203	10~12
Pit201	2.3
Pit202	4.5.7.8
遺構外	13~25



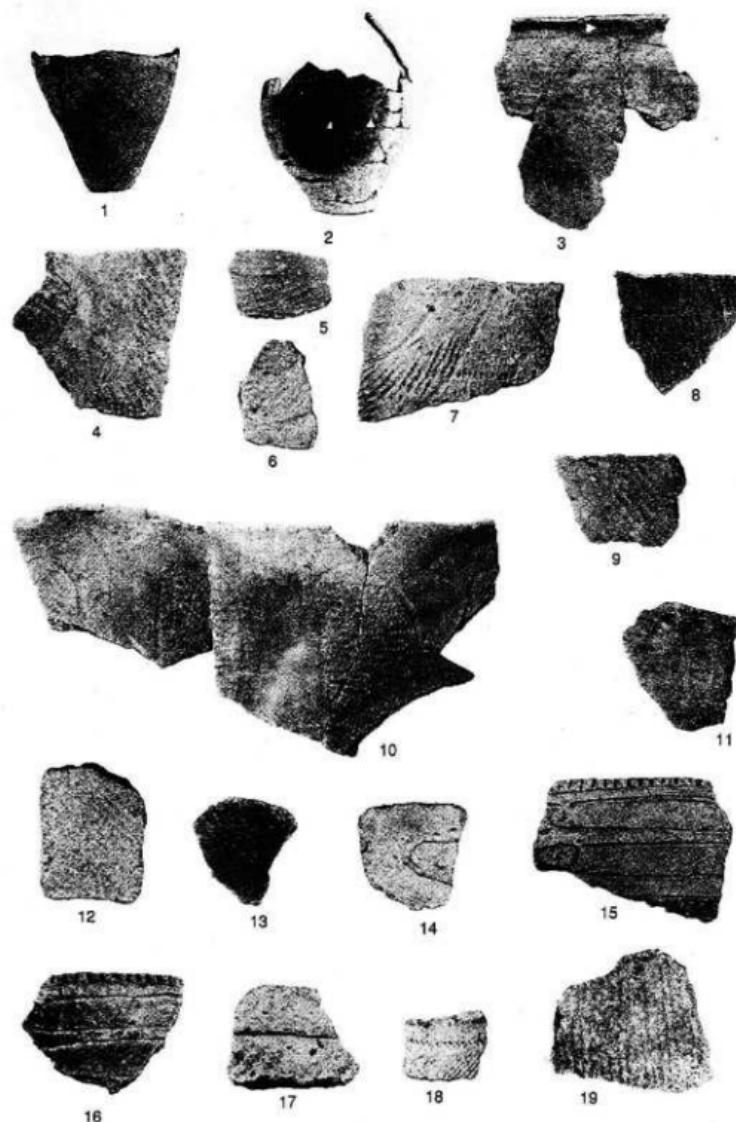
遺構外.....1~22

P L 22 A区遺構外出土遺物



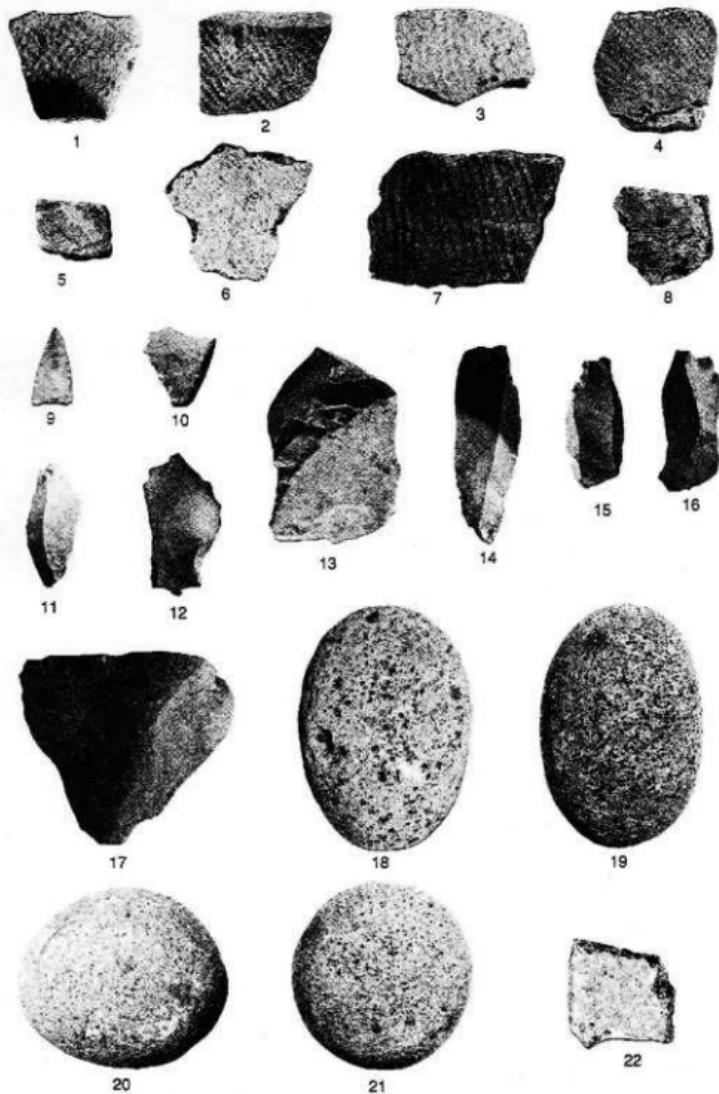
A区遺構外 1~17
 B区SI101 18
 B区SK104 21~23
 B区SK105 19
 B区SD103 20
 B区SD101 24
 B区Pi102 25

P L 23 A区遺構外・B区遺構内出土遺物



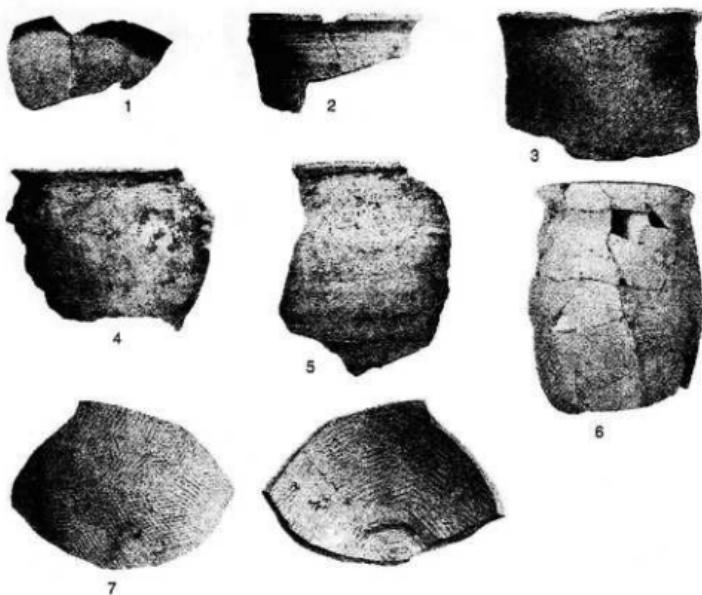
B区遗物外 1~19

P L 24 B区遗物外出土遗物 (1)



P L 25 B区遺構外出土遺物 (2)

B区遺構外 1~22



P L 26 C区遺構内出土遺物

鹿角市文化財調査資料 51

花輪古館跡発掘調査報告書

発行年月日 平成6年3月31日

発 行 者 鹿角市教育委員会
〒018-52 秋田県鹿角市花輪字荒田4番地1
TEL 0186-23-5111

印 刷 所 グラコン社
〒018-51 秋田県鹿角市八幡平字高見田50
